

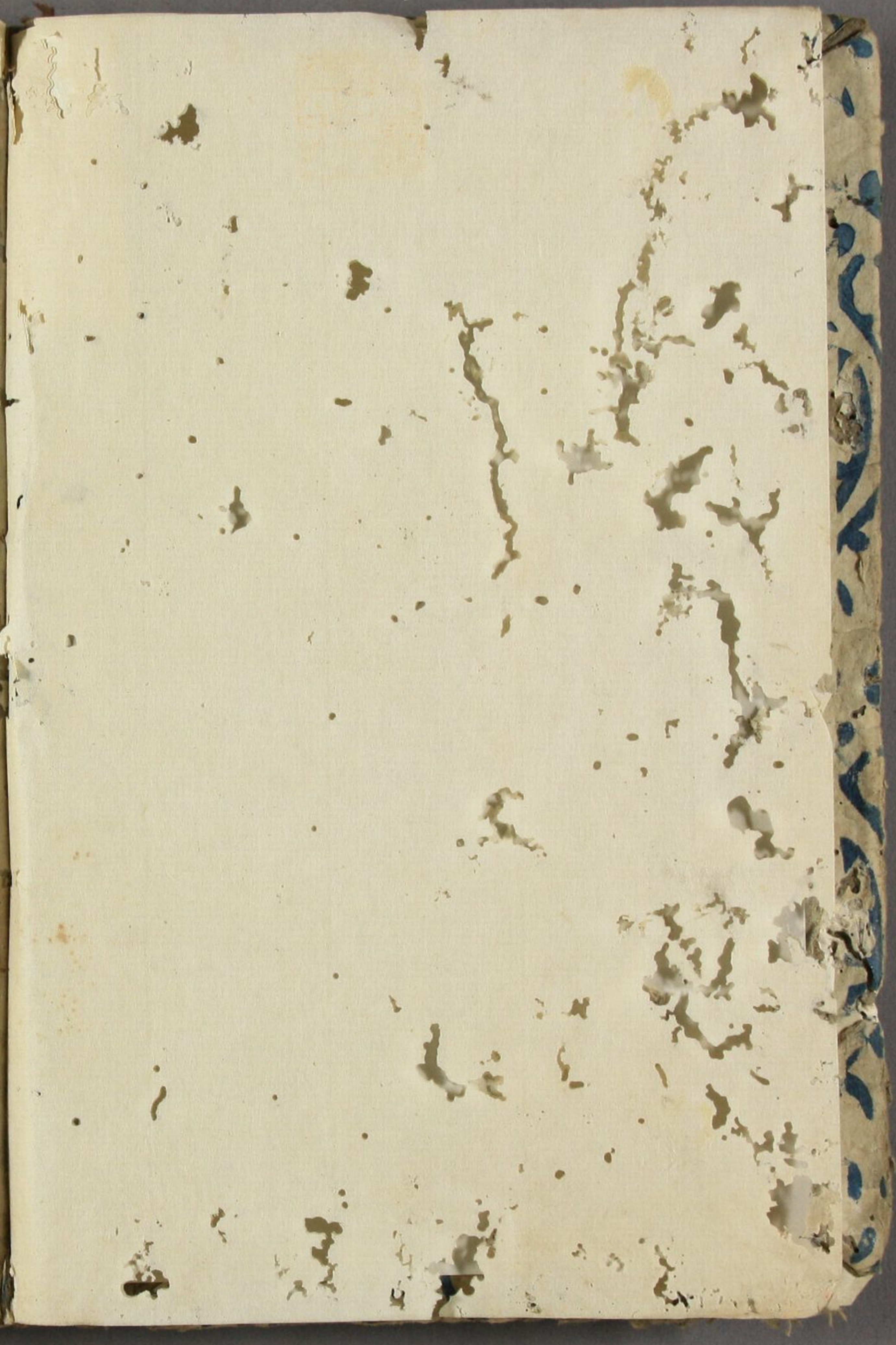


人首一夕話





一の及よはけぬき得た
 うあ人おのりこゝろ
 毎小はりくもなま
 元々あふはに百人一着



こゝろをなほかへし
ふりしづかり雅さへし
めあはれぬ教と筆と
さきよ筆と母を
きぬやはら母冠波わら

たけ尾崎雅が彼えしひ
何處り一人は有つる筆と
一巻の中にも世ふと
久人と世方法とを
藻のうらみくをらひあめ

一夜うつらぬ名も木橋あり
らりあゆむくせりてあはれ
むとて市にいきし去はる初む
実小舟とありて好むも
志今迄志のせりぬ建いひ

飛らぬ竹かきよめ
夫業むじとてぬ松あり
心ゆくは海をわきぬ舟あり
そむのにかき木

花園三位公燕卿

波龍主人

百人一首一夕話卷之一

目錄

天智天皇 御製譯

中大兄皇子鎌足と因幡結々話

大極殿小入鹿と斬話

朝倉山木九段の話

持統天皇 御製譯

大友皇子謀反の話

宇治橋合戦の話

柿本人麿 歌譯

人麿傳系説話

人麿二人の妻の話

九段山

蝦夷又子乱と起す話

古人皇子謀反の話

大海人皇子東國に落ち上り話

持統帝遠方行幸の話

石見人麿の子孫傳り話

筆柿の話



大和夫人摩の滑柄納之話

山部抄人歌集

赤人九と山柿のり話

猿九太夫歌集

中納言家持歌集

氷上川継謀及の話

家持美男の話

安部仲磨歌集

遣唐使の話

仲磨安南へ漂着の話

和歌會の八雲の條と掛の話

海北若冲赤人車跡考の話

白壁皇子老年へ太子へ話

早良親王種継加殺へ話

吉備公唐より帰朝の話

仲磨の従者唐女と娶へ話

明徴作意 旁及故事

歌道可講 異聞兼備

一夕之話 百人之詩

蘿月と影 桂林一枝

小竹散人題

先本
我國れあすの

なすたきなり

大

宝

公物

大極殿

公省の後の

正殿大極殿

朝堂あり

周の明堂

比京城の

製ハ僕乃

西京

拾芥和名

抄に記す

大極殿

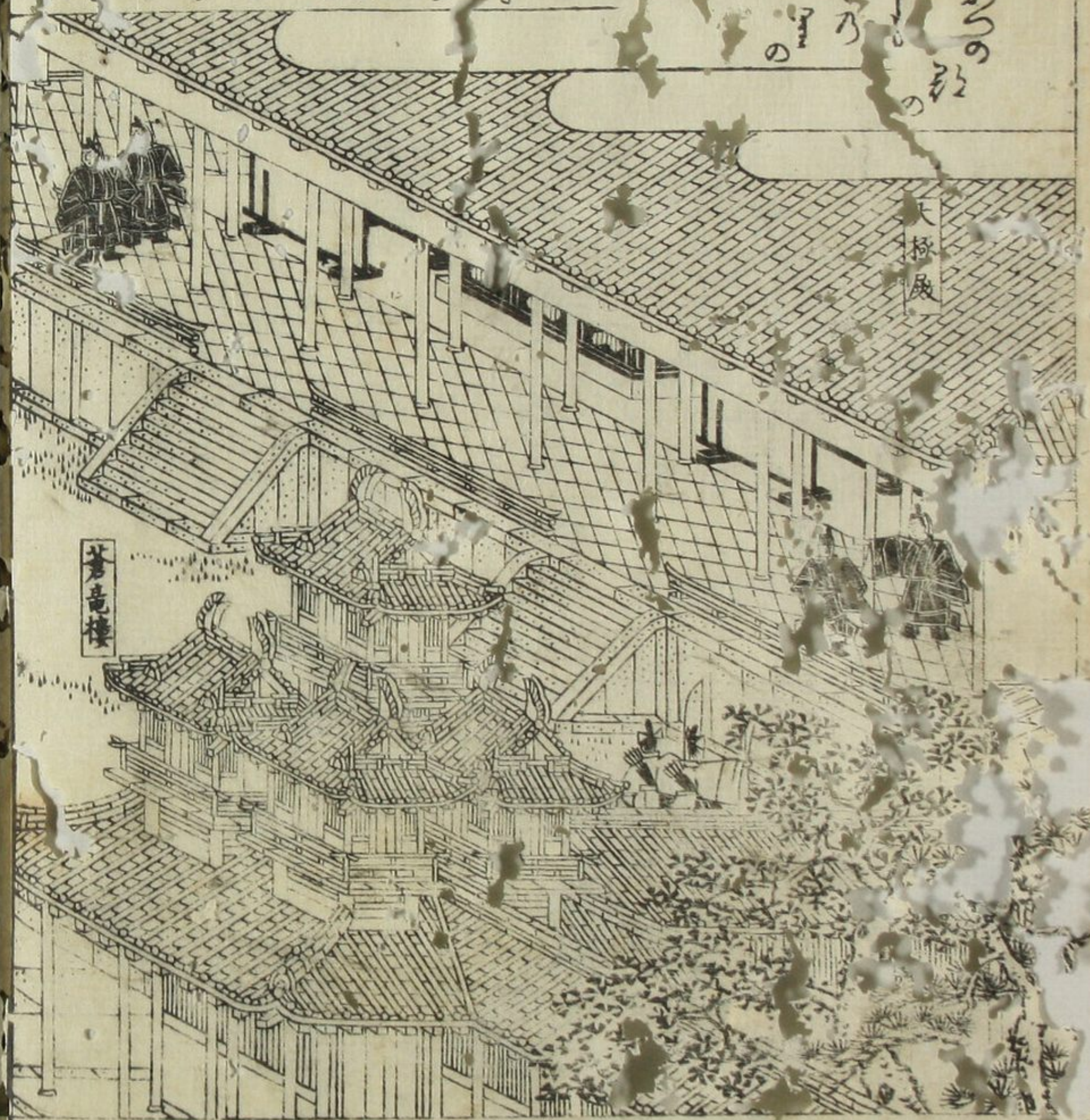
大極殿

大極殿

大極殿

大極殿

大極殿



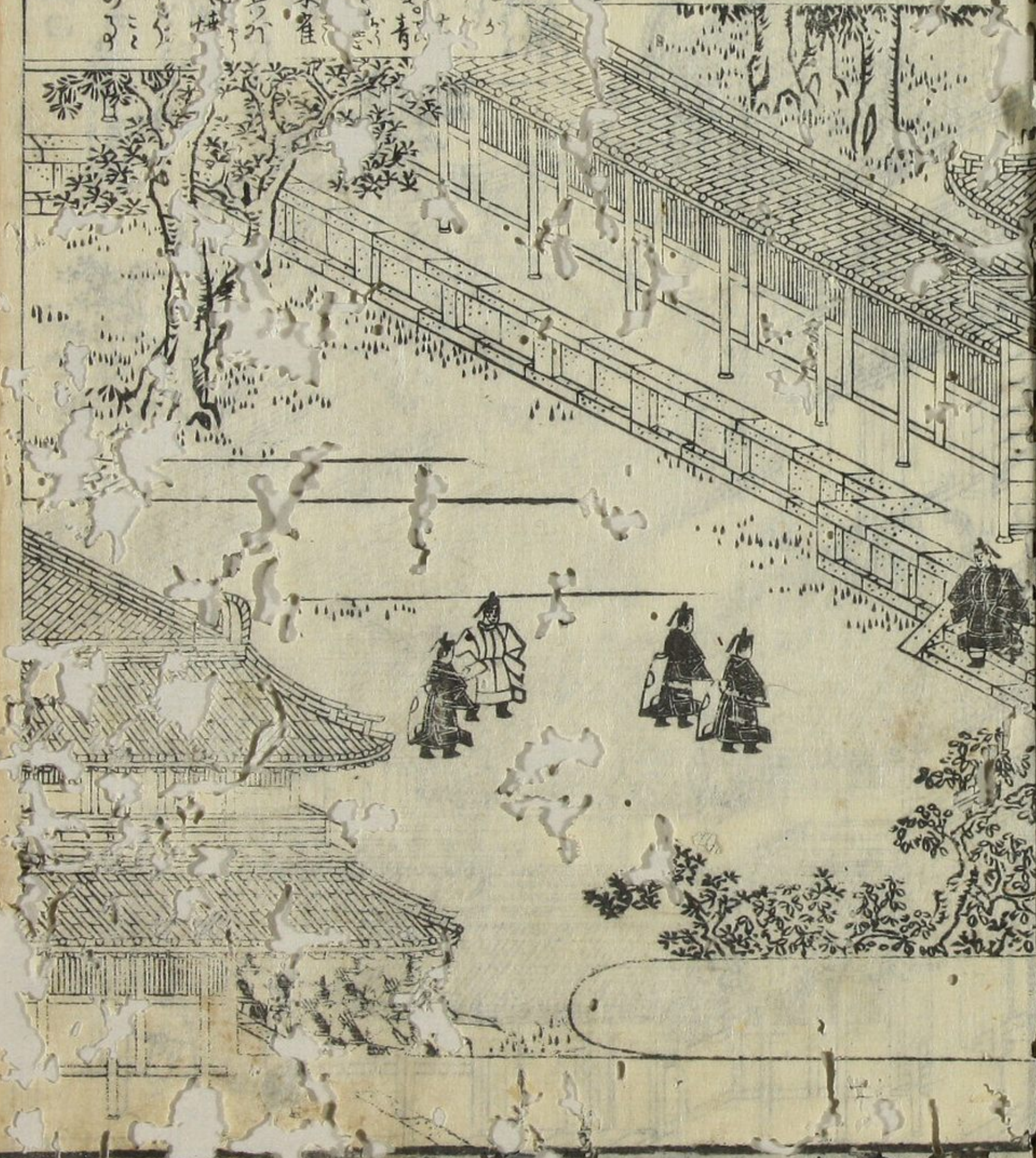
天極殿

若竜樓

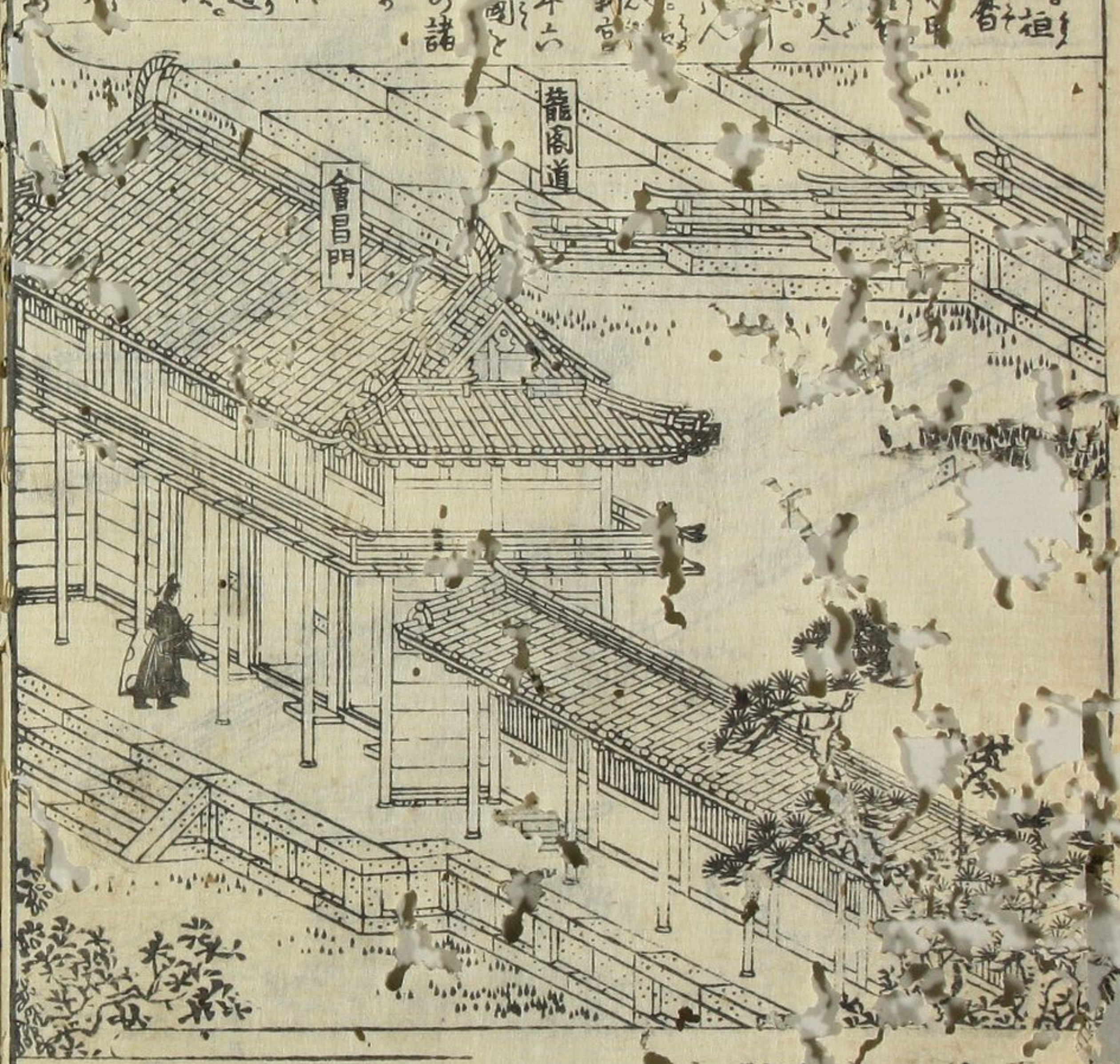
南尾道

江守家次書曰
寛平九年
又建於龍
正殿東階
上極御也
及以
御東邊
具上
瑞興御

けさ都
 詔あつ平
 海末と
 旧史
 百練抄と
 梅と信美
 元年四月
 小治と
 大治と
 極殿と
 終白虎
 天會昌朱雀
 地掛之
 知れ
 遊宮の



平安末
 武帝延香
 十二正月甲
 國首聖字大
 村の地
 都を遷
 山内新宮
 月度
 新官の諸
 門を造
 日十二年
 冬十月車
 駕に遷
 時
 り



白
 後三条帝
 延文二年
 五月廿日
 大極殿
 尾可用本
 之田堂下

盛衰記曰

此は帝の御時堂也

今一物と云ふは

つる大極也

顔と云ふは

小竹造也

こは成り

大極殿也

大極殿也

火極殿也

火極殿也

火極殿也

火極殿也

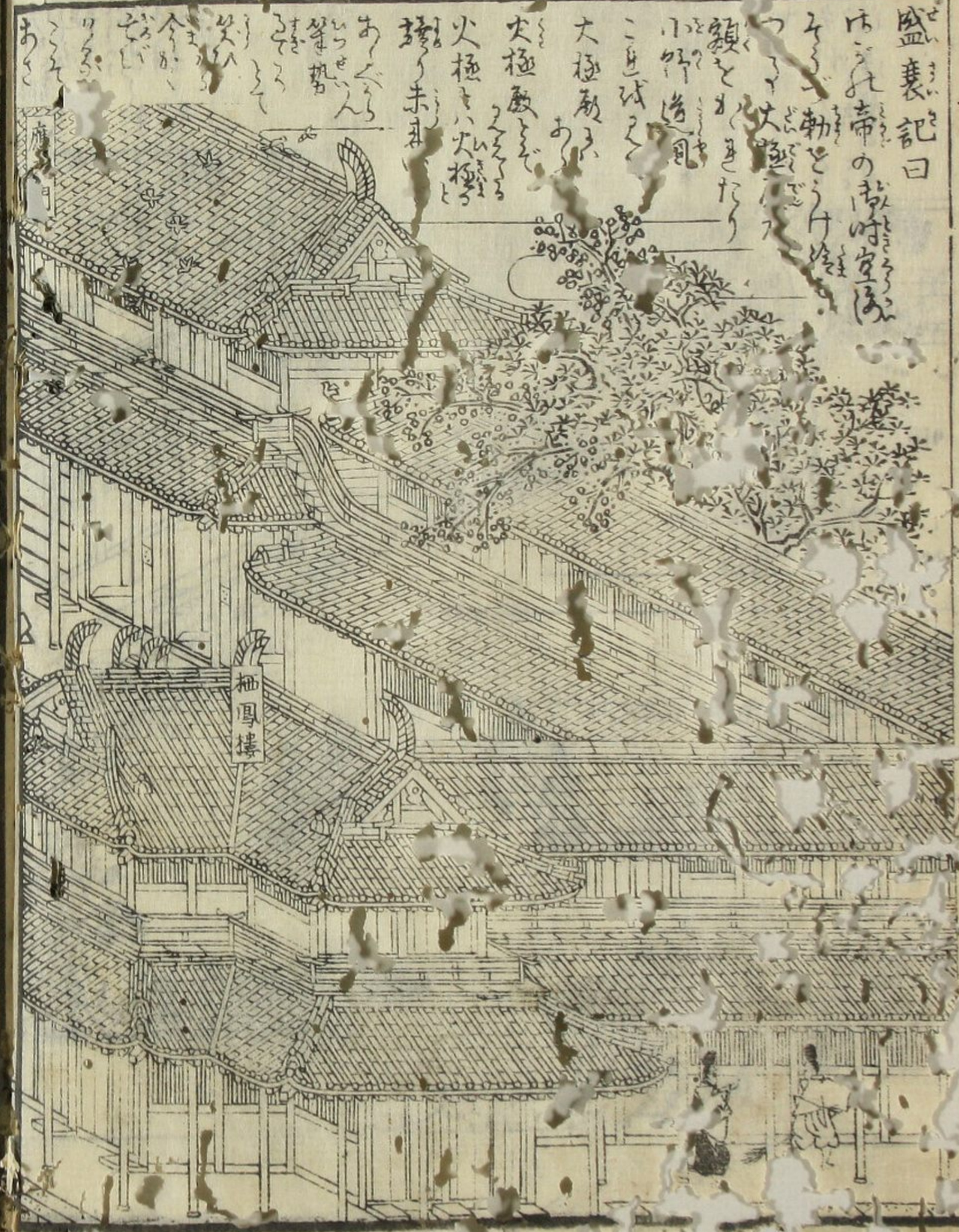
火極殿也

火極殿也

火極殿也

火極殿也

栖鳳樓



これ

善哉

謀而

意天

門と

原と

業の

世に

あは

あは

あは

あは

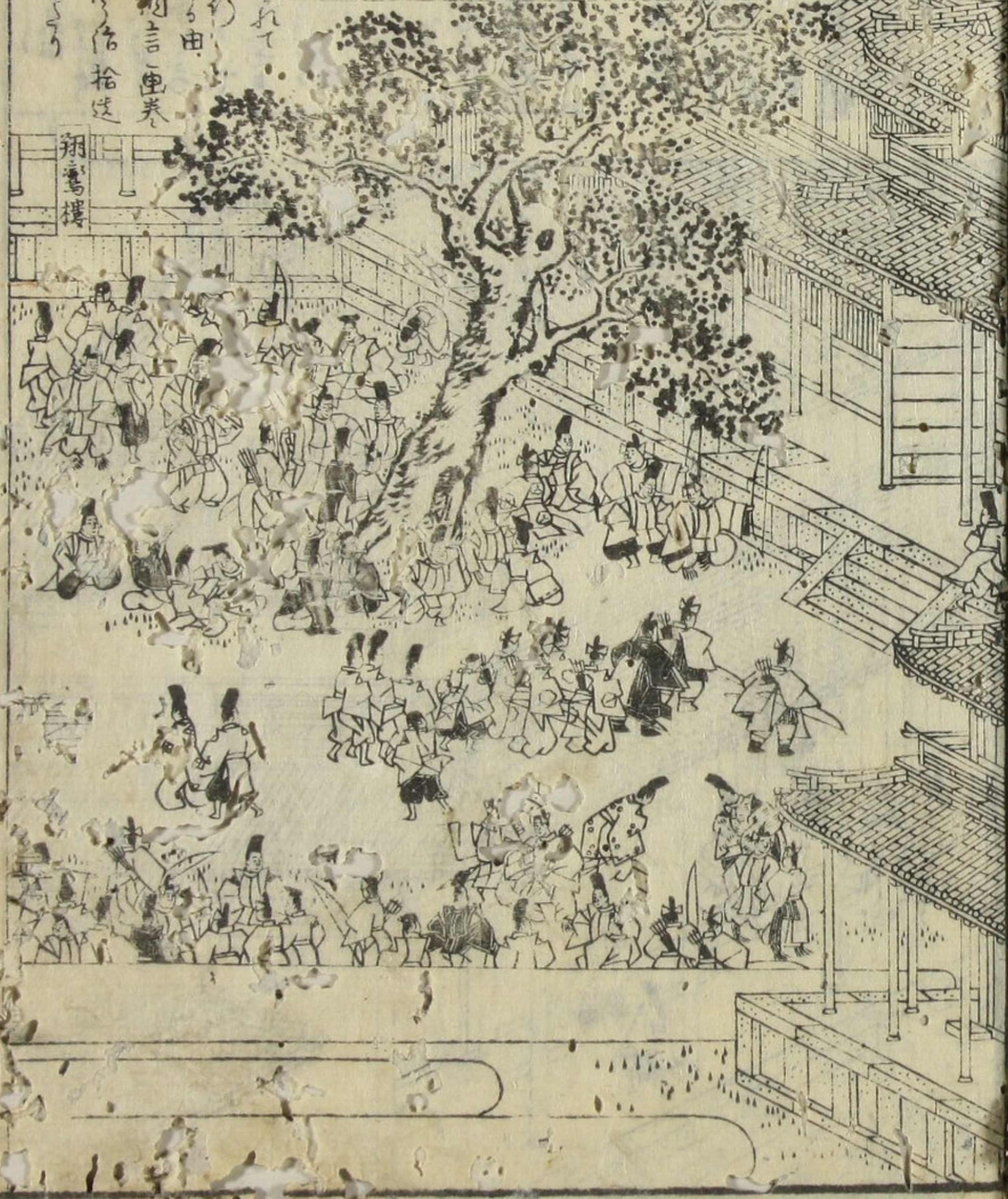
あは

あは

あは

あは

翔鶴樓



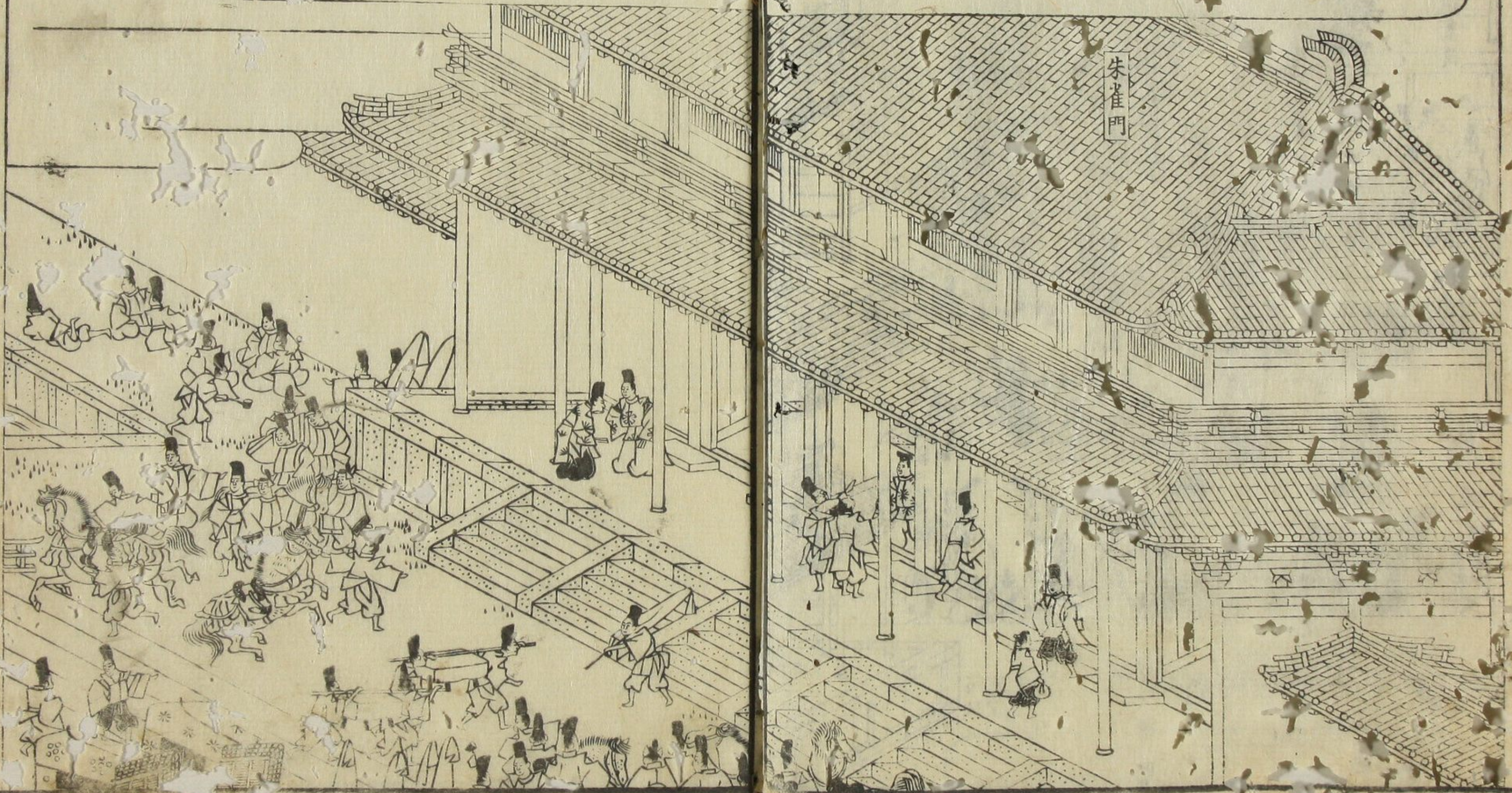
伴大物言一由卷

物及字拾送

子

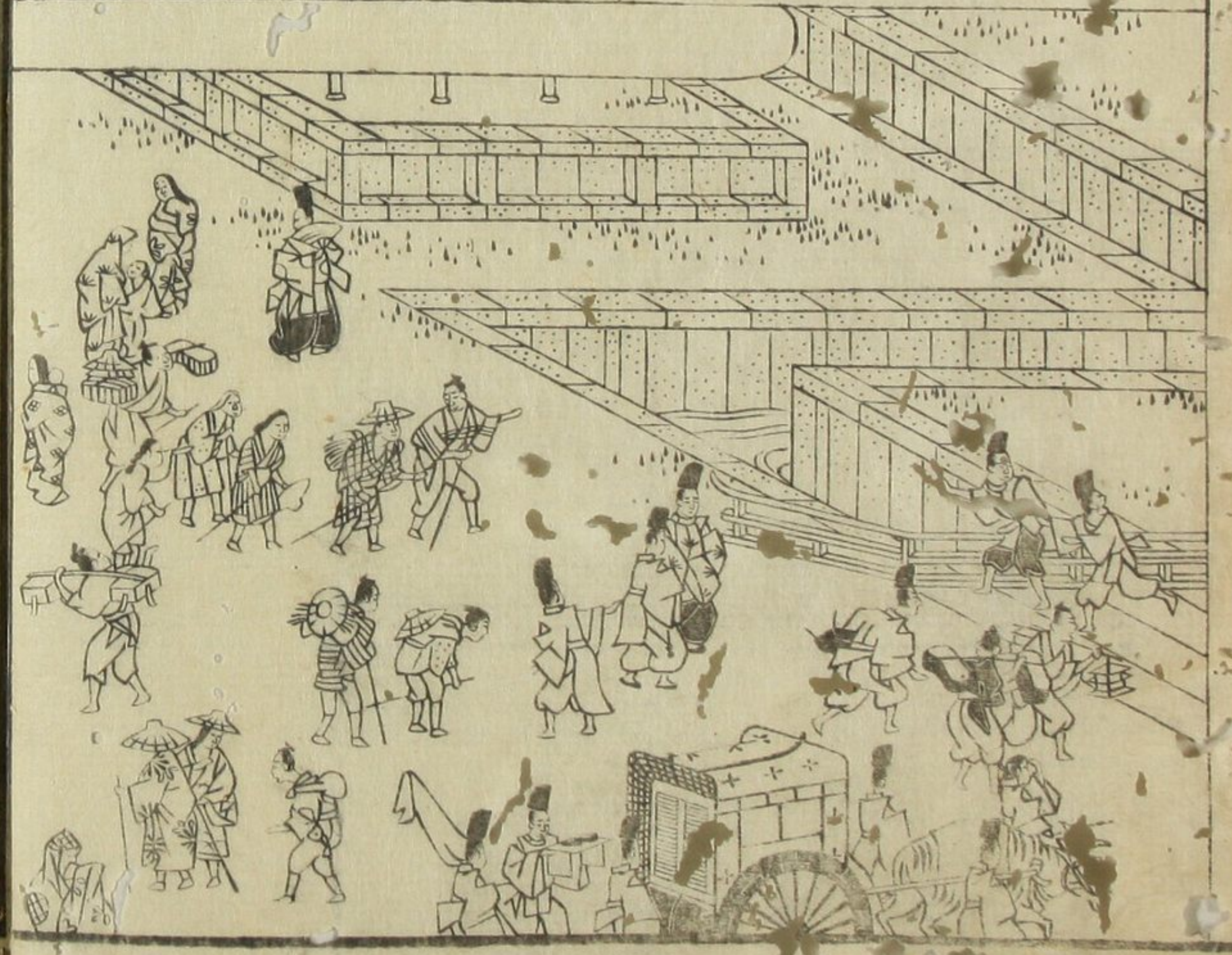
著園集曰
 ひろく 現象
 のせたる
 秘法と二言
 朱雀門
 鬼のぬすみ
 續日本紀曰
 西武天皇
 平六年二月
 癸巳朔天皇
 御朱雀門覽
 歌恒云

朱雀門ハ官城
 十二門の内南方
 行門あり
 羅中門
 七軒五戸柱ハ
 あらぐく朱
 漆
 青葉
 七
 相



天智天皇の御初名と葛城
 皇子とも中の交
 の皇子ともやま
 所諱と天命開別
 天皇ともやま
 天智の平城の朝
 の所時、淡海夏
 天皇の所徳と考
 漢土の例まな
 謚はともやま
 か、稱はともや
 文の舒明太皇序
 母、室の皇女は
 皇極天皇文齊
 明天皇ともやま

天智天皇の御初名と葛城
 皇子とも中の交
 の皇子ともやま
 所諱と天命開別
 天皇ともやま
 天智の平城の朝
 の所時、淡海夏
 天皇の所徳と考
 漢土の例まな
 謚はともやま
 か、稱はともや
 文の舒明太皇序
 母、室の皇女は
 皇極天皇文齊
 明天皇ともやま



天智天皇

秋乃田のるるのいふ
 秋乃田のるるのいふ
 秋乃田のるるのいふ

此の制は祝集秋中よ歌あすすしと入す秋の意
 稻の実のす秋の田を歌ふりしとせし假名で
 仮名でしとせし其の序をふきしとせし其の國を
 きん中しとせし其の神をりしとせし其の神をりしとせし

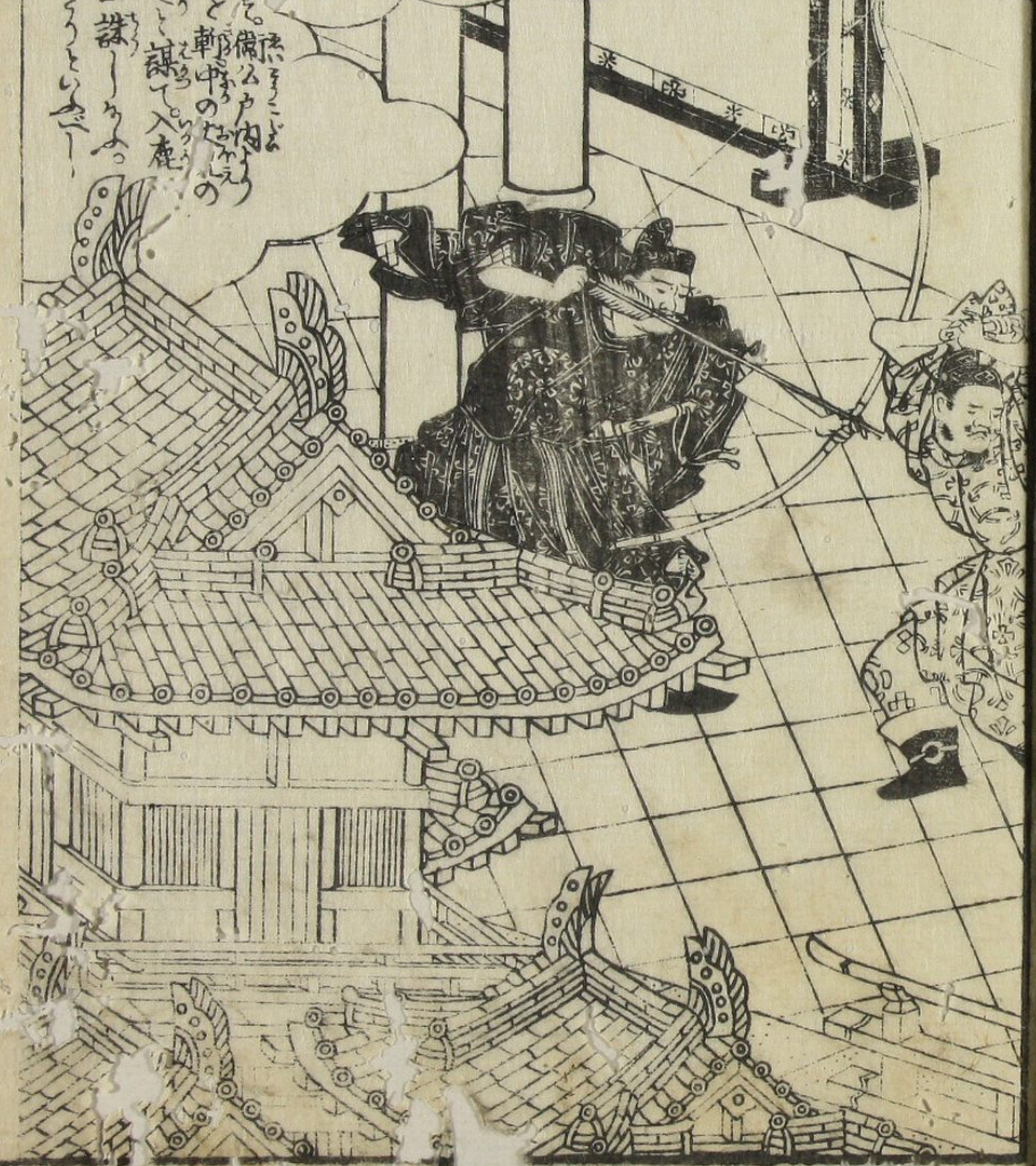
して苦勞なるものなり。これ天子の御身より、
作せしむるものなり。天皇の御身を、
たゞ敷息の御子とて、衣子とす。神の御子とて、
一字を衣と一字の訓とす。みづから、
とす。

天智天皇の事

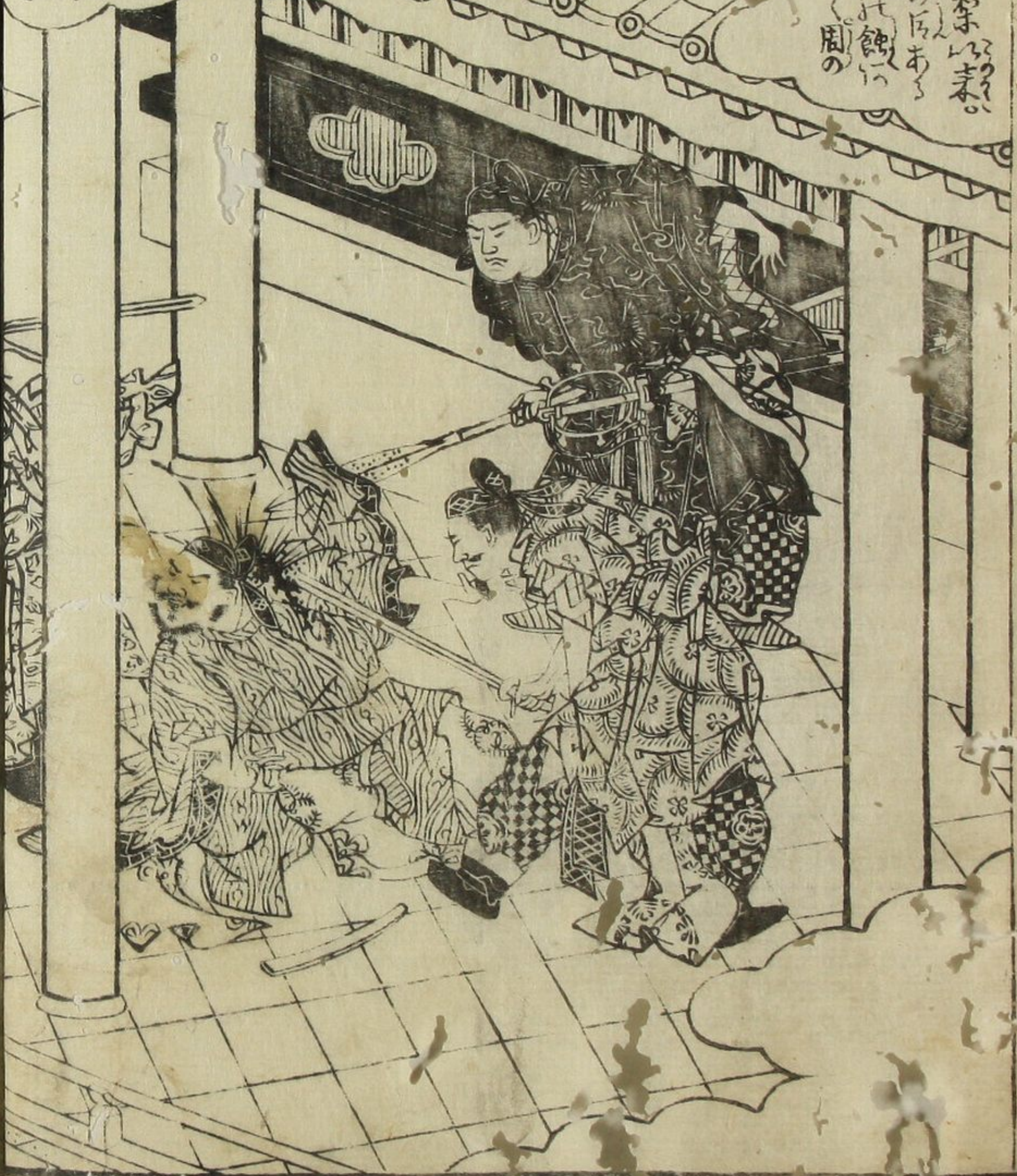
皇極女帝の時、獲我の蝦夷大臣、
けり。入鹿、勢強大く、
故常は、
とす。

切て虚病と構へ、三島と、
の御弟、輕の皇子、
す。宿直が、
万民と匡へ、
鎌足、
下官、
のミ、
りれ、
る君、
極帝の御子、
す。

い... 李...
國に運れる所あり
... 周の
... 漢...
... 魏...
... 蜀...
... 吳...
... 晉...
... 宋...
... 齊...
... 梁...
... 陳...
... 隋...
... 唐...
... 宋...
... 元...
... 明...
... 清...
... 宣統...



... 漢...
... 魏...
... 蜀...
... 吳...
... 晉...
... 宋...
... 齊...
... 梁...
... 陳...
... 隋...
... 唐...
... 宋...
... 元...
... 明...
... 清...
... 宣統...



へき際をゆきさうけよ大化の時の弥生の頃中大兄の御事
 楓の本の下より鞠の市遊りし後足も伺せせりし時
 大兄皇子の所當鞠まつき脱走りをと鎌足直まよし彼所當
 取く手は赤歩前を繞てくを杖捧けりきりおと大兄皇子も繞り
 これを取はさうこれを睡ひのこめりしに隔たりありし
 他人の耳目に憚りし時の博士南淵先生の所よ尋ね通ひ
 るに託け大兄皇子と鎌足と途中往還の同く肩比へて走り
 大謀をたしよと鎌足かやうもゆりしに皇子の所んは叶はら
 ざりしはれく鎌足議してやれりし大事故謀るに輔佐の人
 りよよとす獲我の倉山田麿のむすめ嫁納く君の妃となし婚姻
 の脈となりては大きに陳説彼とをさすは計りとゆと成の道

これより近きいひしはれりしと大兄皇子大に悦て其議よほひたま
 へて鎌足すれとらふりし倉山田麿の家はけく媒せしに倉山田も
 大に悦ひて其むすめ大兄皇子はなまりしとこれより倉山田も
 肉ころの計となりしは此時獲我大臣椒夷子入鹿の甘藷の園は
 大なり家もと起双へ父の椒夷の家と宮中へ移し家内を
 と移し己の男子女子にけしきも王子と移し家の外はたし
 を構へ門の傍は兵庫御他は常よ力士として兵具所持せし
 又椒夷も又長直しり者も令くと取傍山の東の家は道に池と
 城と他は庫内起く弓箭を儲へ常よ五十人の兵を候へ其身を
 も清やめ其餘万りの儀式を禁中よひしりて殆及連の
 中大兄白皇子ひろふ倉山田麿よりしひなまやうはきん
 中大兄白皇子ひろふ倉山田麿よりしひなまやうはきん

我帝わがみかどもなる表文うらふみづかひと所前ところまへより讀唱よみうたする役やくと決きまり命いのちすしつる表文うらふみづかひ
 ありし間ま鐘かねと計かり入鹿いしかと斬きりぬけりて其日そのひは命いのちを合あはせ
 へし作つくらりしれい倉山田くらやまのうら領りやう東とうへ退ひきかりぬけて其日そのひは命いのちを合あはせ
 天皇大極殿てんかうだいごくでんより出陣しゅつじんしり中大兄ちゆうだいえい皇子みまろハ所見ところみ古人こじん皇子みまろハ其王座そのおうざの
 侍さむらいはすし鐘かねをひらき入鹿いしかを疑うたがひし性せうは晝夜しゅやを
 帯おびりし所ところ初はつめはしり佛ぶつ像ざうのみよひ合あひの戲あそびをこし相あいせし
 今日けふの昇殿のぼりでんよりたせりて常とこ劍けんを解ときありし入鹿いしかゆゑもさく笑わらひて
 劍けんと解ときし所ところ前まへより思おもひせしりて倉山田くらやまのうら磨ま席せきに進まりて三韓さんかん王おうの
 表文うらふみづかひ讀唱よみうたする間まは大小おほい皇子みまろしりぬけて起たり衛門府ゑもんぷの官人くわんにんは冷ひやで
 禁裏きんりの十二じふにの儀ぎに録ろくめさせしり人の仕来しらいと絶たりぬけり長ながき槍やりと
 靴くつ殿でんの傍わらわは隠かくれぬし鐘かねをひらき矢やを持もちり加勢かせいの用意よういせし
 又また犬養いぬかいの連勝磨れんしょうまは三韓さんかんより進調しんてうせし箱はこは二振ふたの劍けんをかくし
 入りし所ところ持もちりぬ倉山田くらやまのうら磨ま表文うらふみづかひと讀唱よみうたする間まは當あたりしり彼箱かのはこの中なか
 たり雨あめの劍けんと佐伯さへ連子磨れんしごと葛城かつらぎの稚大養わかおほいの連網田れんあみと西人さいじんは投なげり
 ん合あはせしり入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり命いのちを合あはせしり入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり
 かくて倉山田くらやまのうら磨まの三韓さんかんの表文うらふみづかひ既すでに合あはせしり命いのちを合あはせしり入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり
 鹿かが忍しのびて起たりしり倉山田くらやまのうらの流ながし汗あせ渾身みづかはぬしり
 かく声こゑ乱みだりて手て致いたしりぬ入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり命いのちを合あはせしり入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり
 間まは倉山田くらやまのうらの王座おうざ通とりぬけりしり命いのちを合あはせしり入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり
 流ながしりしり中大兄ちゆうだいえい皇子みまろハ子磨しご等ら入鹿いしかを威おそはせしり進まりしり
 入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり命いのちを合あはせしり入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり命いのちを合あはせしり
 入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり命いのちを合あはせしり入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり命いのちを合あはせしり
 揮うりし片足かたあし斬きりぬ入鹿いしかを王座おうざに轉まりしり命いのちを合あはせしり入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり
 罪つみは明あかりしり命いのちを合あはせしり入鹿いしかを王座おうざに轉まりしり命いのちを合あはせしり入鹿いしかを不ふ忘わすれぬしり

詔して何れをとりて大鹿を入鹿とてとらふやと作せしむるに
大兄皇子平伏して奏しけり入鹿のく陸謀を企て朝敵
滅一日嗣の帝位を継げんといふとかくとてひつり天皇
位に以て大臣を代へ侍らんとす天皇言ひ侍らむ
直に玉座を起て殿中に入侍せしめんとす入鹿
めつり利しむるに中大兄皇子は法興寺に馳入り城を構へ備を
たてしむしひれを諸皇子諸つとて中大兄皇子は侍らむりては護
たす市見古人皇子一人の私宅をまゝ御門口と杜く出たりすも
入鹿は横死せしめたまふかくて入鹿を死骸に父の蝦夷に賜せりれは
蝦夷は漢直等春馬を振聚め甲冑懐き兵器を持せり蝦夷は
助け軍陣を設け大兄皇子とてとせしむ將軍巨勢徳とて
入鹿を誅す伏せしむと諭しけりひれと蝦夷は後堂の者

も罪せしむるに大兄皇子は同し遁去ぬるに蝦夷は我子入鹿の
大兄皇子を討てしむるに恨むる甚しきとてつみえりれをやく
其家は討手とせしむるに誅す伏す時大兄皇子は蝦夷の家を以て
朝廷より御座り天下の記録國紀天皇紀其外は室の規とて
大兄皇子は火に焼失しりし船の史惠尺を以て大兄皇子は入國
紀とてと取し大兄皇子はひれとてこれに父の乱る日本先代の記
録もあし焼失しりし船の史惠尺を以て大兄皇子は入國
とてとらふに其時帝は帝位と中大兄皇子は譲らんとす
めりし大兄皇子退くべきに蝦夷は語りては後を許さるるに
今古人の皇子八君の弟兄なり輕の皇子八君の弟男なりとて
君天に受つたなりとて直にひれとてこれに輕の皇子
子に帝位をすめり恭謙のくみりし大兄

皇子保く鍾足の教に上りひたりしむる。其母帝(孝德)皇子(天智)の
奏し、^{天皇}上りては、^{天皇}帝(天智)の皇子(天智)を詔して、^{天皇}即位と授けたり。人(天智)の
輕の皇子(天智)固く辭し、^{天皇}古人の皇子(天智)は、^{天皇}讓りたり。古人(天智)皇子(天智)又、^{天皇}おのれを
仰り、^{天皇}天皇の詔(天智)を遠り、^{天皇}髪と截て、^{天皇}吉野山(天智)に入たり。ひるおを、^{天皇}輕の(天智)白
子(天智)も、^{天皇}今(天智)せん、^{天皇}たてて、^{天皇}即位と授けたり。これ(天智)は、^{天皇}孝德(天智)天皇(天智)の、^{天皇}孝
德(天智)帝(天智)即位の、^{天皇}中(天智)大兄(天智)皇子(天智)と、^{天皇}皇太子(天智)と定め、^{天皇}鍾足(天智)河内(天智)大兄(天智)が、^{天皇}たて
詔(天智)す。河内(天智)司(天智)と、^{天皇}めたり。ひる、^{天皇}其(天智)子の、^{天皇}古人(天智)皇子(天智)謀反(天智)と企(天智)たり。
これ(天智)は、^{天皇}古人(天智)皇子(天智)り、^{天皇}より、^{天皇}鹿(天智)と睦(天智)り、^{天皇}より、^{天皇}鹿(天智)と保(天智)せしむ。時(天智)の
死(天智)と、^{天皇}ひる、^{天皇}より、^{天皇}謀(天智)反(天智)と辭(天智)す。よ、^{天皇}か、^{天皇}ひ、^{天皇}け、^{天皇}髪(天智)と、^{天皇}助(天智)と、^{天皇}吉野(天智)に
入(天智)り。ふ、^{天皇}謀(天智)反(天智)して、^{天皇}獲(天智)我(天智)物(天智)部(天智)の、^{天皇}推(天智)子(天智)等(天智)と、^{天皇}相(天智)謀(天智)す。禁(天智)裏(天智)と、^{天皇}詔(天智)す。
と、^{天皇}これ(天智)は、^{天皇}ひる、^{天皇}吉備(天智)の、^{天皇}笠(天智)垂(天智)り、^{天皇}よ、^{天皇}もの、^{天皇}お、^{天皇}た、^{天皇}け、^{天皇}す。皇(天智)太子(天智)も、^{天皇}中
大兄(天智)の、^{天皇}告(天智)す。よ、^{天皇}より、^{天皇}す。お、^{天皇}より、^{天皇}軍(天智)兵(天智)は、^{天皇}流(天智)り、^{天皇}古人(天智)皇子(天智)を、^{天皇}付(天智)せたり。

これ(天智)は、^{天皇}古人(天智)遂(天智)に、^{天皇}自殺(天智)し、^{天皇}た、^{天皇}其(天智)母(天智)白(天智)雉(天智)五年(天智)十月(天智)孝(天智)德(天智)天(天智)皇(天智)崩(天智)し
たり。ひ、^{天皇}け、^{天皇}と、^{天皇}皇(天智)極(天智)帝(天智)重(天智)祚(天智)し、^{天皇}た、^{天皇}ひ、^{天皇}齊(天智)明(天智)天(天智)皇(天智)と、^{天皇}稱(天智)す。
と、^{天皇}これ(天智)は、^{天皇}十二月(天智)新(天智)羅(天智)と、^{天皇}百(天智)濟(天智)と、^{天皇}合(天智)戦(天智)たり。百(天智)濟(天智)の、^{天皇}将(天智)軍(天智)
福(天智)信(天智)援(天智)兵(天智)は、^{天皇}日本(天智)に、^{天皇}より、^{天皇}た、^{天皇}天皇(天智)皇(天智)兵(天智)は、^{天皇}流(天智)り、^{天皇}百(天智)濟(天智)と、^{天皇}す。
と、^{天皇}これ(天智)は、^{天皇}七月(天智)の、^{天皇}五月(天智)帝(天智)筑(天智)前(天智)の、^{天皇}國(天智)は、^{天皇}幸(天智)し、^{天皇}た、^{天皇}朝(天智)倉(天智)の、^{天皇}女(天智)
あり、^{天皇}た、^{天皇}軍(天智)兵(天智)は、^{天皇}集(天智)め、^{天皇}甲(天智)兵(天智)と、^{天皇}修(天智)め、^{天皇}繕(天智)ひ、^{天皇}兵(天智)糧(天智)と、^{天皇}儲(天智)へ、^{天皇}設(天智)け、^{天皇}
百(天智)濟(天智)と、^{天皇}救(天智)り、^{天皇}と、^{天皇}た、^{天皇}ひ、^{天皇}よ、^{天皇}より、^{天皇}す。お、^{天皇}より、^{天皇}朝(天智)倉(天智)の、^{天皇}女(天智)
あり、^{天皇}た、^{天皇}其(天智)頃(天智)中(天智)大(天智)兄(天智)皇(天智)子(天智)は、^{天皇}母(天智)帝(天智)に、^{天皇}從(天智)ひ、^{天皇}て、^{天皇}朝(天智)倉(天智)の、^{天皇}女(天智)は、^{天皇}た、^{天皇}せ、^{天皇}
と、^{天皇}約(天智)倉(天智)の、^{天皇}女(天智)は、^{天皇}假(天智)ふ、^{天皇}と、^{天皇}山(天智)中(天智)に、^{天皇}ま、^{天皇}せ、^{天皇}た、^{天皇}ひ、^{天皇}り、^{天皇}材(天智)末(天智)を、^{天皇}け、^{天皇}
と、^{天皇}九(天智)本(天智)の、^{天皇}ま、^{天皇}と、^{天皇}建(天智)せ、^{天皇}た、^{天皇}ひ、^{天皇}は、^{天皇}時(天智)の、^{天皇}人(天智)墨(天智)本(天智)の、^{天皇}所(天智)に、^{天皇}た、^{天皇}設(天智)
と、^{天皇}朝(天智)倉(天智)の、^{天皇}女(天智)は、^{天皇}中(天智)大(天智)兄(天智)皇(天智)子(天智)は、^{天皇}所(天智)に、^{天皇}ま、^{天皇}せ、^{天皇}た、^{天皇}ひ、^{天皇}り、^{天皇}朝(天智)倉(天智)の、^{天皇}女(天智)
朝(天智)倉(天智)の、^{天皇}女(天智)は、^{天皇}中(天智)大(天智)兄(天智)皇(天智)子(天智)は、^{天皇}所(天智)に、^{天皇}ま、^{天皇}せ、^{天皇}た、^{天皇}ひ、^{天皇}り、^{天皇}朝(天智)倉(天智)の、^{天皇}女(天智)

又ひる一の
 了武帝吉野よりしるる路
 落多の時を田うて直まはり
 と奮ひし有りて案伊勢路以
 るてを信國にたもむきまを
 兵とみりしひれに大なる子
 を七一給ひあり
 後麻山よりたる支那と
 そののころを信國にたもむきまを
 此のころにやけうへり
 こゝ大なるものころ
 かへ鼻をたれど鼻
 ろかんと此帝乃
 ろに。終ては
 の小坂古きよ
 ありと信せら
 ありと信せら



一語と
 ありと信せら



これの倉山の中へ... 假使... 要害... 供奉...
人の名... 北野の齋場所... 彼... 訓...
民と... 中... 大... 皇... 所... 版...
業... 諸... 令... 卷...
大職冠... 藤... 病...
其家... 其... 其...

九月より... 十二月... 天皇...
所... 四十... 世... 天皇...
の... 今... 十二月... 天皇...
見... 陵... 大... 鏡... 皇...
信... 上... 日本... 紀... 外...
...

所切名ハ鶴野讚

良の皇女ナリヤ

母ハ天智天皇帝

母ハ大臣藤我山田

石川磨の女ナリ天

武天白王の皇太后

ナリセナヒナ

帝位ニ即タリ

武天白王の大室ニ

年ニ山崩ナリ

所謚セ高天原廣

野姫天皇又持統天

皇トモ稱ナリ

持統天皇

夏はあけぬ

あけぬ

あけぬ

新古今集夏部ニ入ル

春はあけぬ

あけぬ

新古今集ニ詠ナル時代の風ニ直ニ入ル

その又ハ伊阿ヤヤの詞ニ入ル

万葉集ノ何ノ何ノ歌ノ詞ニ入ル

万葉集ノ何ノ何ノ歌ノ詞ニ入ル

万葉集ノ何ノ何ノ歌ノ詞ニ入ル

万葉集ノ何ノ何ノ歌ノ詞ニ入ル

万葉集ノ何ノ何ノ歌ノ詞ニ入ル

万葉集ノ何ノ何ノ歌ノ詞ニ入ル

万葉集ノ何ノ何ノ歌ノ詞ニ入ル

万葉集ノ何ノ何ノ歌ノ詞ニ入ル

万葉集ノ何ノ何ノ歌ノ詞ニ入ル

藤原の

大和

高市郡

都

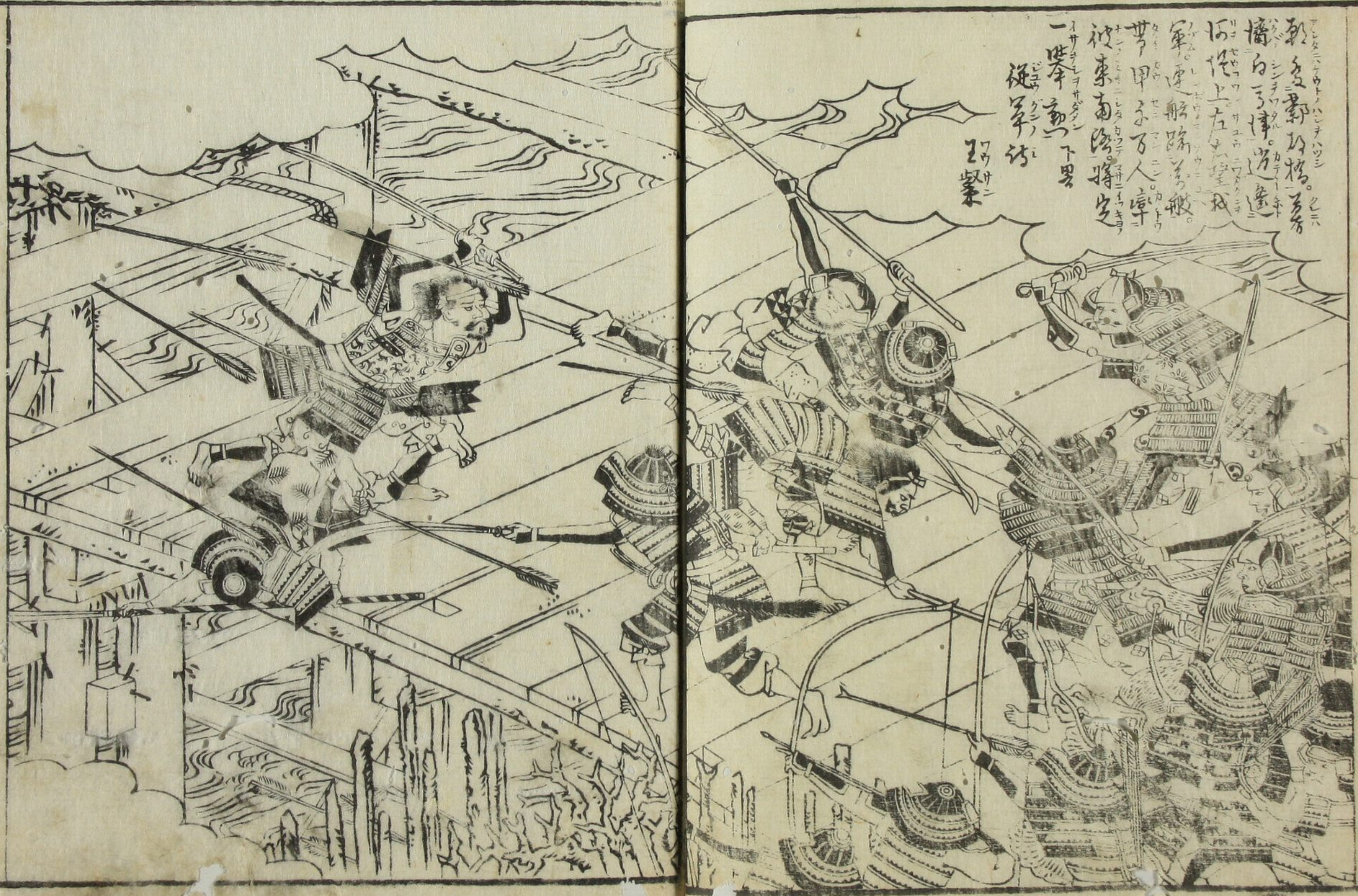
近き十市郡の香具山に下る民の家は夏は丸の櫃と云ふ
めもばらと云ふていふていふていふていふていふていふ
志は新古今集も百人一首も衣ほすていふていふていふ
なむめりすていふていふていふていふていふていふ
のく志願すていふていふていふていふていふていふ
製は眼前衣のほていふていふていふていふていふていふ
けす故は百人一首の諸家の註釋はほていふていふていふ
むほていふていふていふていふていふていふていふ
ひの考はほていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ

雪も雪のひらもや白くこのころはほていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ

持統天皇の御製松と句なすのちていふていふていふ
らすはほていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ
とていふていふていふていふていふていふていふ

持統天皇の話

天智帝の八年は内大臣藤原の鎌足公葬せしむるは大夫の



朝多野乃格...
播白...
河...
軍...
帶甲...
彼...
一...
從...
王...
案...

口詔よりしあひて必大罰と被らんしやれおと獲我未
兄續き起し盟しといふれ等五人君に流し置ひまはしく所又天皇
詔にけりまはしりてさしめしめりて天神地祇の深罰とけり
子孫断絶しと家つ亡しひてしりれん残し四人の事をもあはれ
皇子の一味の盟をたしめしめりて天智帝嗣承りて
木井連雄君より子の吉野のあまをりり大海人皇子のまはしり
尾張の西國は令せしめり山陵と遷らせたりんしてまののん夫
とめりやと其人夫もは兵器たしめりてあまをりり承りて
山陵と遷らせたりんして君の所あまはしりて大和の出来たりん
まのの君より早しむれたりんして所難にけりて
ヤリより又一人告まはりりて山陵近江の東より大和の東より

處は候と置きて又菟道の指しを令て大海人皇子の所用末代
運はしりてのあまをりりて令せしめりて下りてりり
あせしめり大海人皇子よりれは進めれさせたりんして信せり
信の辨しせと適しと病を養ひ身代令せんおまをりり志
今よりまののりりてしりて後身代たすきりりすりて
吉野はあまをりりてあまをりりて用意とせたりんして
依等々令し急しめりてあまをりりて付むりりて船をせり
きりて不破の道と塞しとあまをりりて作らせし吉野はあま
たしりて事宣はしりてあまをりりてしりて馬をあまをりり
れりりてあまをりりて持統帝のあまをりりて皇子の草壁皇子思坂皇子
木井連雄君等二十餘人女孺十餘人後りりて所依たりりて甘羅
の村とせたりりてあまをりりて時獵者二十餘人の連なりりて所依たりりて

菟田の郡に至る時伊勢の貢米を負せし馬五匹引つぎて
 行進し其の悉く其馬を奪ひ米を棄てて歩らざるの事
 大守よりふしつて日既暮り山道暗くしては自由
 ならず民家の垣を壊ち木戸を閉し夜半の頃徳の郡
 まで行く程大海奉る邑中の者も皆閉りて天皇帝の皇子
 東國よりせしやがも夫も早く東國より入るて
 命を授けてはしるものなりとせんし道狭くして伊賀の郡
 に入りては當國の郡日等教百人加けつぎて高市の皇子も
 余れまひしるも伊勢の鈴鹿より入るし國日之宅の在床
 等五百人と率て所方よりかたり大津皇子并々惠人かも馳附
 所休はたりれれを供奉のく力加へて勇みすしりも村岡男依
 徳の軍兵と千人と發し不破の道とて塞ぎ皇子は進へ

進く素直の邸家よりして留め奉りては日既暮し
 れし間山背部の小田及び安守の阿加布をせりし大海道の軍
 卒一推搦の五百餘とりの馬も亦く東山道の軍兵發せり
 こゝから大海人の皇子の所軍勢よく盛りたりし時大友
 皇子は往いて近江の朝廷より群衆も大海人皇子吉野に
 東國に入らばしりて大友は愕然とて東國へ往く降参せん
 とし又山澤は逃匿せんし其れは人々も亦く東國中
 大友驍勇なり時一人大友皇子の所おはりてや遅滞は
 後を待たざる健なり騎馬の兵は皆大海人皇子の所
 進み付けしるも是れは是れも大友皇子は深き海に
 沈みたりし其れは是れも大友皇子は深き海に
 大友皇子の大将大伴馬来田其弟吹負も時の勢はるし大海人

皇子は津島に又尾張の國を以て都鉦釣も二万騎を引率して
大海人の所方へ進みしを以て大友方の軍勢の氣は益々
時高市の皇子大海人の所方へ進みしを以て大友方の軍勢の氣は益々
の又遠くして海濱に便所、早く進みしを以て大友方の軍勢の氣は益々
中を歩みしを以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の軍勢の氣は益々
所上を遷して進みしを以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の軍勢の氣は益々
唐置始連等河大の、数万騎を引率し、伊勢の大友方の
越へ大和へ向せ、村岡男依等、数万騎を引率し、不備ありて
直へ近江の都へ攻め入り、めりしを以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
勇將大野果安、相戦ひ、お負へ引退し、時、男依等の大友方の軍
息長横川に戦ひ、これを破れ、敵のちねりしを以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
亦く直へ進み、瀬田に至る、時、大海人皇子の所方の兵も、これ

赤符をつくり、これを珠の形に、うらみ入る、こゝは、大友皇子の
群れを將へ、勢田の橋の西へ陣河たて、進みしを以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
大、く、ねり、向、旌、旗、を、掲、げ、し、煙、塵、大、く、け、り、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
橋板と截り、之を、く、り、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
板と踏、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
且、亦、強、弓、の、者、を、設、け、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
軍、を、せ、り、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
は、す、く、暫、し、め、ら、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
勇、三、軍、を、冠、し、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
こゝへ、引、か、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
の中、軍、へ、割、り、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の
皇子の先鋒の大将、智、を、大、く、怒、り、し、を、以て大海人の所方へ進みしを以て大友方の

まゝのりつゝも崩せたらしく勢がれを禁すも休む向へ大
海人皇子方の雅は智る柄柁瓜と討つ男依の軍をすま
大養の連谷塩ゆも付しうれい大友皇子今いせんしめり
なむひりてあつたよきおならぬ隠山は入るめを益れ
業はたまた臨行は詩を賦しくのれなり

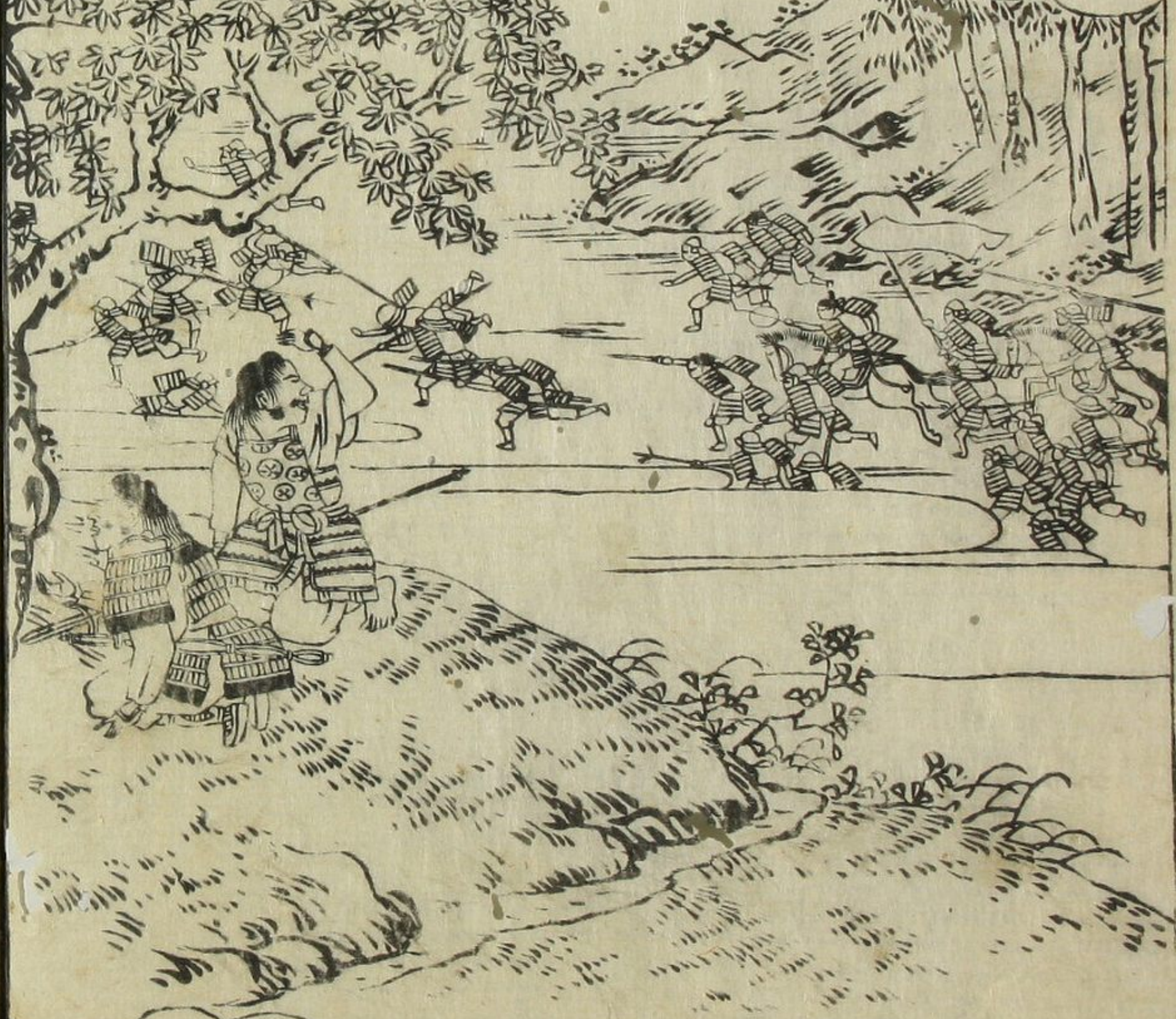
金鳥臨西舎
泉路魚寡主

鼓声催短命
此夕誰家向

此詩のころは金鳥八日の西舎のやうして日影の
西のやうにこころで鼓声短命は軍破せしめし
も今いの命はかたすやうに泉路は魚寡主の
冥途のゆく宿の客主のゆくこれら冥途は赴くま
ちりやうきうたはれ家よむひりてゆくと休せたり

さては時當りて大友皇子の所方より左右の大佐及び群臣皆
進んで物部連磨を舎人一人とて討北の山依を討ひ
るもく大友皇子はすまはしりて眼中精々耀く常人の
性よりまゝすすんむせはしりて天性の悟りけり
少時より学問と好まをばし武の才も通はしりて
威は詩にばし道徳を修身の備えはしりて其終とせ
るのや廿五歳にわがまはしりて大海會
大友皇子既七ひは近江の朝廷の群臣の中は大友皇子
中より右大臣中津連金左大臣藤原我赤兄大納言巨勢比等
を捕て斬罪處し其子孫とも國に流しはしりて
帝位に即たすうを天武天皇とす其子阿武天皇
后にすまて天武天皇阿武天皇十五年にして朱鳥元年九月

大友は...
 國詩賦の氣...
 文武は...
 天...
 帝...
 是...
 け...



史...
 懐...
 史に論...
 史...
 史...



かゝるつめいはいまひ諸心詔下と諸臣のりめも武藝
せしめしあつて四月の月よめし帝位を即せたり是
すれり持統天皇し天皇中即位のなる市の皇子太政大臣
持統帝はの遠方へ移したまふを好まされし事
吉野のゆきたまひ今月三月は伊勢の事せんよのまひ
り。河原の唐より人表以上三月の事なり人の百
業の妨げなりとすりては五の法めりりて天皇は法を
用いたるなりとすりては唐の法めりりて天皇は法を
法めりりては唐の法めりりて天皇は法を
の百姓男が八十以上の上の縮五十束下りゆり
りれり民の仁徳と作りしぬものなりとすりては唐の法めりり
都賀大和の藤原より遷されし十年二月草壁白王子の所
子河猫の王城より皇太子と定められたりては武天皇と稱
しり。大室二年十月考がし所々のたしひ都賀の所なり
はり。帝不例なり。せしひは所孫帝より天皇とされし
のり。たまひしと天下に大赦ありては百人の傷を度牒を賜は
畿内のむらむら竹く金光明最勝王経を講せさせしひなり
太上天皇の侍侶平愈と称せしひは所孫帝より天皇とされし
十二月二十日は崩所なり。せしひは帝所遺詔ありては崩所の節
羣れ素服し哀感するなり。たまひ文武百官の
り。平日の如くしては葬式もはる。儉約ありては
作せしひ。明年十二月の事なり。大葬ありては

11

先祖はあしらの
 天武天皇
 の白鳳九年
 秋万葉
 集の年ハ聖武
 天皇の神龜元年
 二月廿二日
 林
 家の國史実録
 八二

将本人磨

あしらの
 尾の
 ぬす

拾遺集恋部はむあしらの
 枕詞山さの尾はあしらの
 さねとひらぬす
 長き夜と侍人あぬか

ひらぬす
 ぬす
 山さの尾の
 ぬす
 長き夜と侍人あぬか

将本人磨の話

孝昭天皇の皇子天押帯日命の子孫十六氏とあり中
 将本の姓は日武の、新撰姓氏録は敏達天皇の時将本の
 臣し日人なり其人の家の門は将本の末なり故に将本
 の名は其日武天皇の時将本の末なり故に将本
 の親族とあり又續日本紀聖武
 天皇の神龜元年の間に将本の外孫建石と日人白六位とあり
 五位下と叙せし又将本は漢名を日人又市守と日人なり

正六位上より五位下へ叙せしむるも人丸の
氏族なりし家系たりしかし其詳なりと云す
万葉集の外は伊人のものとあはるものなりけり
著るは持統天皇の伊代の始に石見の國より都
伊勢の心雷岳吉野なりしに集まらるるの法
田皇子高市皇子がもてしむるは新
卑賤なる人なりしなりけり
或書より石見の國美濃の郡小野より所は綾部氏の人
ありしは因の柵の下に神童とてわたりし我

又母り一惟風月のとて教島の道はつと夫婦
ひくこれと撰育す長の出身と和歌の才徳と
一語合氏とて其家九四代血脉綿と相伝ふ長
人丸出羽の柵のありしは長柄の實は細長と
墨のはしとて世の人これに傳ふ其家今相結す
かれ他の柵のありしは長柄の實は細長と
柵のありしは他より人丸の柵とて其家今相結す
人丸の子孫教代連綿とて其家今相結す
系より上らるる柵の小序に
石見國別妻上東時作歌

大和本州曰
 山柿葉如椀
 柿實大如椀
 而圓味如椀
 柿而神之

鹿心椀
 和名
 和未加岐

柿葉
 柿實
 柿葉
 柿實
 柿葉
 柿實



石見國
 人磨出
 現好柿



次の後ハ石見まゝにさるる道とへそいさひめてむなりと龍とん
るも誰一こそ其石川に雲なりともたらしめしと面を
よく暮しんめしとて又いひのほろひけり人丸の祥世の徳
石見のやま角やうのよのろろとて世の月とんとていれ
よりくせりたすかりとれに万葉集の石見國より事よとて上
は長秋の末の反秋よ

石見のやまの山のよのろろとて神と妹とていれり
とら秋の末はしとてものく人丸の祥世のよのろろとて
はく世の月より秋は二条禪園のやの語園人丸の徳一のせれ
ふれく早くの頃ものしひけりとのなりとて又いせよとて
人丸の祖よよものところとてらるる石碑なりとてたらしめり
其ところよいせよとていりすともいふは秋よとて附合しとて

藤原清輔のいり大和國下向せり時彼心の古老の民のいり添上郡の
石上寺の傍に社あり春道の社と稱す其社地よとらるる杉本寺と
稱すこと人丸の祠堂なりとの社の前の田の中よりひきとて採らるる人
丸塚と稱すといふは備前土民のいひに採らるる人丸の墓ハ四人
りよ春道の社にあり採らるる物なりとて人丸の墓ハ四人
のちひたりと採らるる物なりとて採らるる物なりとて人丸の墓ハ四人
たり其銘は杉本朝臣人磨墓と書りその裏に佛菩薩の名号
経教の要文に採らるる又清輔の姓名と書りの下に和歌とありて曰
世とてはるる物なりとて採らるる物なりとて人丸の墓ハ四人
ひりよ葉する人丸石見の心とて採らるる物なりとて人丸の墓ハ四人
せり其例ふまゝとて世の釋教者の説く人丸石見の心とて採らるる物
なりとて採らるる物なりとて採らるる物なりとて人丸の墓ハ四人

記せしむるは世の背命をうす人丸を見せしむるに遺せりしと遺骸と
 大和へうつりて葬りし人丸の墓とて又長明の寺なる人丸の墓は大和の
 石ノ原に初葬しありし人丸の墓といひていひぬるもさうして其の
 寺ハ初葬しありし寺とて又寂蓮法師の家集に人丸の墓の所に
 石ノ原に初葬しありしとありて
 寺に初葬しありしとありて
 寺に初葬しありしとありて

かくてむのいひするの○すうとあり
 わのいひの○なるの末すまひきぬとありて道のゆくゑに
 くらまそつたけゆりし人丸の墓ありしとありて
 白河の卒都導とてむとありしとありて
 白河の卒都導とてむとありしとありて
 白河の卒都導とてむとありしとありて

又今の世は竹ありて人麿の畫像のゆゑに沈の元永元年十月十日
 藤原顯季の妻とて人麿の親信とてありしとありて
 白河院の時時友永房とて人麿の志願とてありしとありて
 慕とて或夜夢中の感得とてありしとありて
 其像の左のゆゑに紙とてありしとありて
 此の兼房友永とて画工とてありしとありて
 はとハ夢中の形とてありしとありて
 此れは初葬とてありしとありて
 兼房のゆゑに沈は眞影に白河院に献せしむるにありしとありて
 沈のゆゑに沈は眞影に白河院に献せしむるにありしとありて
 沈のゆゑに沈は眞影に白河院に献せしむるにありしとありて
 沈のゆゑに沈は眞影に白河院に献せしむるにありしとありて

其彩供の儀式に當日彼真影の前は机置く飯一杯並に菓子
 種々の菓子も造り出さる今日は今も伊豫守長実の
 仲の在り大寺に有る教先少納言宗兼寺和泉寺通徑安藤寺
 忠孝寺次々各膳所也次は献仕人等野郎の盃小鉢子とて
 簀子に候す其後嚴重し勸盃持て白き唐紙二枚とて
 彼讚とひりき文書置くこれ御講次は和歌と誦す今日の
 通懸ハ水風晚来とて歌十三首はこれすれとて
 世和歌の今も人丸の係をわす温福とてとて

先組つて
 十山邊か
 かり万葉集
 部宿林赤人
 己てこの山部の姓
 八歌京天皇の所
 時伊子の来目部
 小指といふ人
 て山部の連とて
 又其は相
 武天皇山部の
 王の姓とて
 山部の姓とて

山部赤人

たみ
 心
 雪

新古今集冬部は
 集は
 た
 みの

かきつゝ
ヨウチ
いひの
けい
いそ
けい
けい

いそ
いそ

いそ
いそ

いそ
いそ

いそ
いそ

大和國保上郡石上



大和國保上郡石上
大和國保上郡石上
大和國保上郡石上

大和皇別

新撰姓氏錄曰

大和皇別
大和皇別
大和皇別



いふれつゝのまじりの赤人の欽しうを新古今は直しと
らざるなり一あるは先万葉の終り解一
たのめしむつたはのしらすそ後河小廬系歌の田
の浦しむつたはのしらすのちきこひの雪の
いふんゆつたはのしらすふあしてはらさる今の終りけ
田子のくちあくれえきしうのさきこひの雪のさ
くすしらすのちきこひ

山部赤人の話

母夏之の古今集の序は人丸の赤人なる人なりと云ふ人丸
あはしんゆつたはのしらすのちきこひの雪のさ
二聖と稱するは話もあるしうはわかれしうは貫之と云ふ

万葉集の大伴池之の終の序は人丸赤人の山部赤人の
これ既喜代より終ひしうせきと云ふしうは人の
位階も人丸ゆつたはのしらすのちきこひの雪のさ
いふ赤人の傳も史書より見ゆしうは中波の抄もたきくは
のちきこひあはしんゆつたはのしらすのちきこひの雪のさ
記の考へきたしうは万葉集のしらすのちきこひの雪のさ
しらすのちきこひあはしんゆつたはのしらすのちきこひの雪のさ
赤人存けの規模しうはしらすのちきこひの雪のさ
家持は報する書も幼少しうは山部赤人のしらすのちきこひの雪のさ
十のちきこひあはしんゆつたはのしらすのちきこひの雪のさ

又祖官位よもに
 つまのりしつす
 或説は元明天皇
 の時の人か
 つハ続日本紀に
 本記佐佐木
 といひやま
 大夫といハ官名
 稱し古今のま名
 序は折本大夫
 のまらちま
 よませい

猿丸大夫

楽やりにいからか
 びのいふきり
 社をうめ

古今集秋部は是貞のみこの家此秋合の
 あつすいり秋のうらハ奥山は散きて
 の中をうめけくはらへ麻のやけつ
 秋ののりけき至極の時

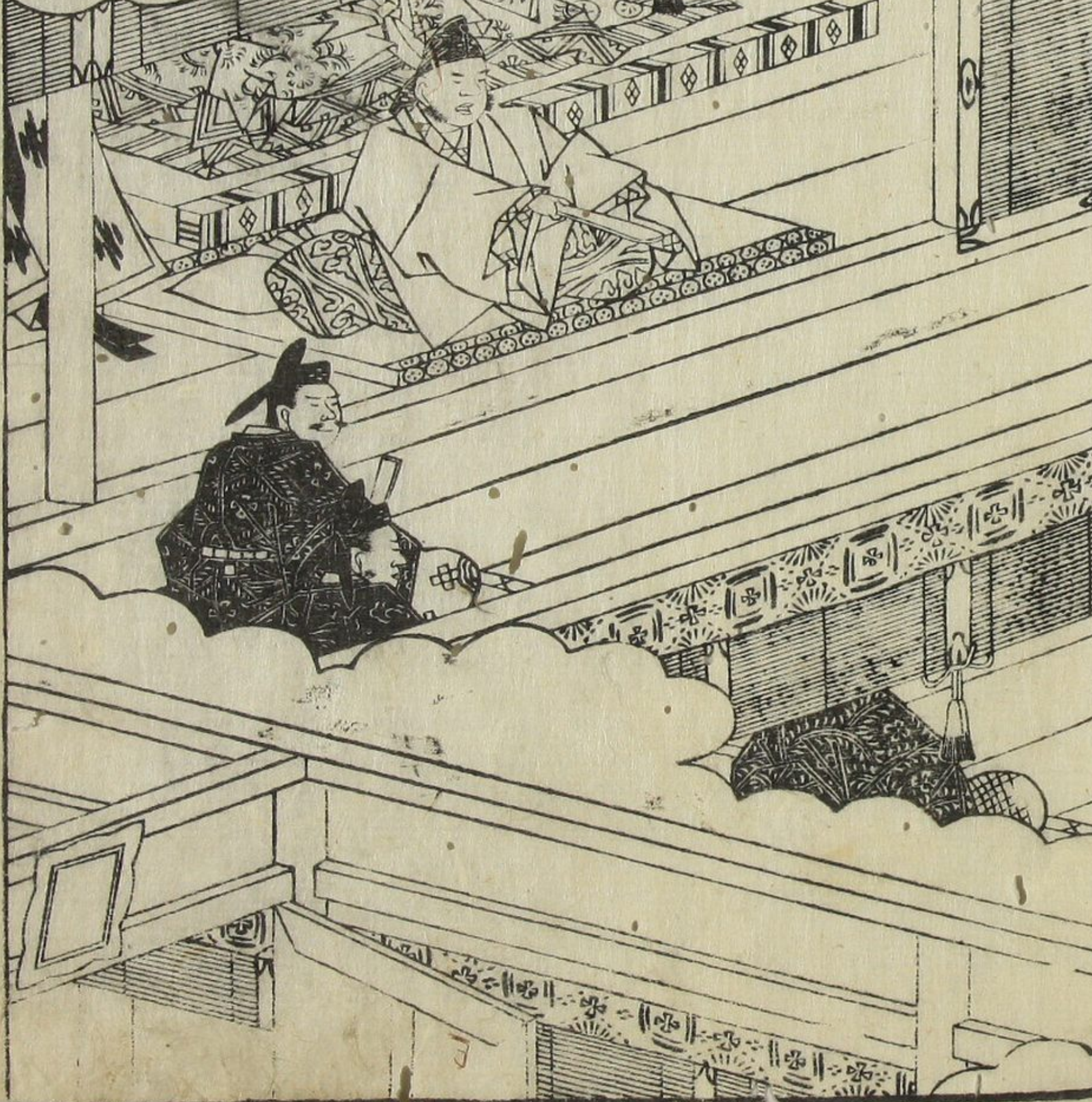
猿丸大夫の語

古今集の真名序は太友の黒子の秋は
 けり黒子ハ老孝天皇の仁和年中の人
 今よよとくあすの秋なを今猿丸大夫の秋
 事ハ不審なりけり其故ハ黒子猿丸大夫
 人よすけりハ古今の真名序は黒子の
 への猿丸大夫の次しけり
 人あすの秋は猿丸大夫の化けり
 又祖もつすのりか
 又猿丸大夫と弓削の道鏡と号す

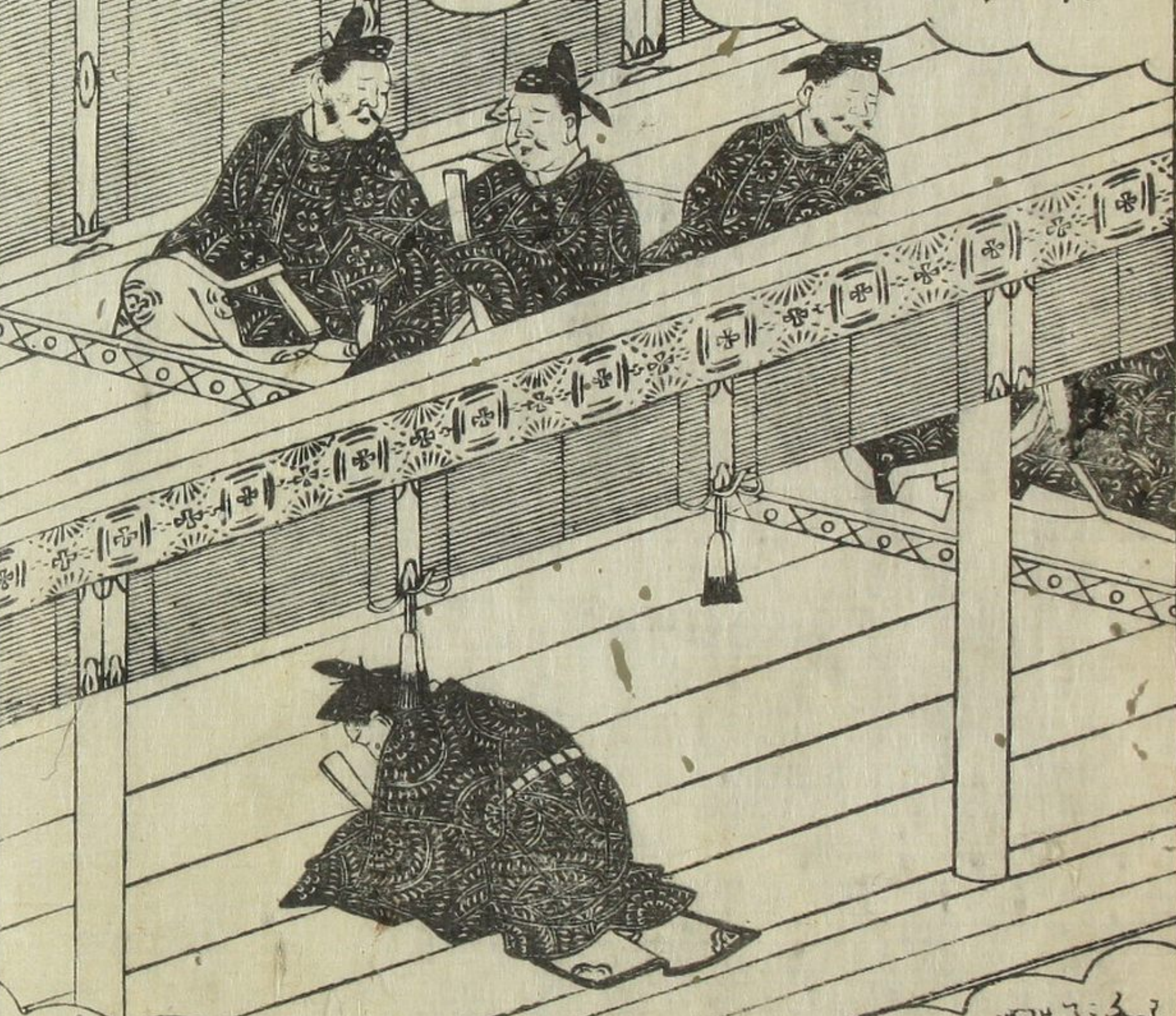
もつひはあやうき秘傳の説とせうこれ天武天皇
 の皇子より削の事ありませと道鏡の御流して
 付了らるる御文のせよとて言の狂言よまてしり所
 猿丸大夫と今道鏡の御流せしは信宗祇臣のあやう
 起事と彼道鏡ハ淡路廢帝の御事とてあやうき孝謙天皇よま
 んかひりく龍を甚くしり流廢帝者よまると流れたまひし
 孝謙帝よみ御用ひたまひしり流廢帝と御中
 うぬやうなせたまひ孝謙帝は廢帝を流れたまひし
 りのせたまひしり流廢帝は即せたまひしり流德天皇
 中よまうかして祇德帝の天平神護元年は道鏡と太政大臣
 と一因二手は法皇の位を授けたまひしり流道鏡と西
 前殿よませあ大下以下の官人は令し流道鏡を御流せしめ

けしきつこれ先太宰府の神皇阿曾尊よりその善く流
 權威の盛なりと見えこれよりのハ幡文の御詔と御流
 道鏡と帝位は即あたまり天下太平なりと奏せしり
 道鏡より御流すよまよるしり流帝和氣の法皇よみて
 勅しこのたまひしり流不里流の御流は御早く宇佐に
 ハ幡文の御命と御流せしり流其時流ひりし法皇御
 てよませたまひ幡大津勅使とて御流し御流し御流
 告んあたまりし御流し御流し御流し御流し御流し
 のない官爵と御流し御流し御流し御流し御流し御流し
 の阿曾よ付途中て真人豊山よりし御流し御流し御流し
 亦法皇よりし御流し御流し御流し御流し御流し御流し
 り御流し御流し御流し御流し御流し御流し御流し御流し

然もこれ
 宇佐此
 神勅と
 神勅と
 清唐
 道鏡乃
 威厳と
 けいけい
 神勅と
 述べた其
 せんを遂
 いんす
 あらび易
 王臣塞々
 将ふ是をいふ



秦は夏后
 唐乃武后
 嬪行有
 良國法
 孝謙帝
 源道鏡
 を寵
 終して下
 天威
 心を



和清唐
 國史
 類聚

伯夷叔齊^{ひやくい ちくせい}の山も隠^{かく}まひていふとすは
 磨^ありし忠直^{ちゆうぢゆう}の人なれと汝^なく豊^{とよ}ふ一言^{いちごん}を感^かんじたり字
 依^よる諸^{しよ}く都^{みやこ}へ海^{うみ}を帝^{みかど}に奏^{そう}すりし清磨^{せいまろ}八幡^{やくふん}大神^{おほのかみ}の神^{かみ}に
 兼^{かみ}てこす我國^{わがくに}天地^{てんち}開闢^{ひらく}しるのこ君^{きみ}を礼^{らい}ひのちら唯^{ただ}
 小定^{こさだ}りぬ志^{こころざし}し今^{いま}道統^{みちのつと}守^{まも}りて賴^{たの}む帝^{みかど}位^ゐとをりしを
 以^もつて神靈^{かみたま}怒^{いかり}く其^{その}祈^{いのり}に歎^{なげ}す大津日副^{おほつひふせ}の山^{のやま}に皇統^{みかどのつと}の人^{ひと}を以
 てのつと^{このつと}の神^{かみ}にをりしを^{このつと}に奏^{そう}すれは朝廷^{てうてい}
 羞^{かたじけ}しと^{このつと}百官^{ひやくくわん}百司^{ひやくし}は磨^あり言^{ことば}知^しけりおほ^{おほ}き汗^{あせ}を流^{なが}
 りし時^{とき}に帝^{みかど}の默^{もく}然^{ぜん}としてわりし道統^{みちのつと}守^{まも}りて大^{だい}怒^{いかり}は
 磨^あり穢^{けが}磨^{まろ}と改^{かへ}りて大隅^{おほすみ}のふを配^{おと}流^{なが}りしも大^{だい}に道^{みち}
 鏡^{かがみ}り威勢^{いせい}を恐^{おそ}むくはれは支^さゆへにならりし其^{その}に宣^{のたま}へて
 二月^{ふたつき}帝^{みかど}は因^よの由^{よし}義^ぎのみまの事^{こと}をひりし道統^{みちのつと}惟^{ただ}と
 食物^{しよくぶつ}を帝^{みかど}にすめりしをりしとて^{このつと}の道統^{みちのつと}守^{まも}りて

のかなをりしとていざりしを^{このつと}の道統^{みちのつと}守^{まも}りて
 けしし翌^{あした}の四月^{しがつ}は由義^{よしぎ}のみま^{このつと}都^{みやこ}をりしとて
 あつたせれりし今年^{ことし}八月^{はつがつ}は山崩^{やまぶせ}ありしを藤原^{ふじわら}百川^{ひつせん}に
 系^{けい}良^ら継^{つぐ}と相^{あひ}ま^つりて天智^{てんち}天皇^{てんてい}の孫^{まへ}白壁^{しろかき}の王^{おう}六十二^{むそふに}
 年^{とし}にせれりしと皇太子^{すうたいし}とてはけり帝位^{ていゐ}は即^{すなはち}ちりし是^{こゝ}
 十^{じゅう}れをら元^{もと}仁^に天皇^{てんてい}とて道統^{みちのつと}の現^{げん}れ天皇^{てんてい}を裁^{さい}しちりし
 大^{だい}逆^{ぎやく}の罪^{つみ}ありしを^{このつと}志^{こころざし}帝^{みかど}の氣^きをわたりしを流^{なが}しはるの位^ゐを
 下野^{しもの}國^{くに}に築^{たか}りし別^{べつ}當^{たう}とて即日^{きふじつ}配^{おと}流^{なが}りしをりしを
 まつて^{このつと}を立^たてりしを^{このつと}大^{だい}逆^{ぎやく}守^{まも}りて道統^{みちのつと}と猪^{いの}丸^{まる}大夫^{だいたふ}の
 子^こにりしを附^ふ會^ゑの役^{やく}に今^{いま}猪丸^{いのまる}の^{こゝ}にりて道統^{みちのつと}の^{こゝ}
 彼^あ女^{によ}位^ゐの甚^{こゝろ}きしを鬼^{おに}女の^{によ}輩^{たい}に^{こゝ}をりしを^{こゝ}

祖父大納言從二位守曆又大納言從二位孫人姓大伴
皇の天平十七年
從五位下空島十一
手參議任す光
仁天皇の天應元年
從三位桓武天皇
延曆元年參議東
宮大夫兼陸奥按
察使鎮守將軍
同二年中納言高
四年薨す

中納言家持

新古今集冬部はしむす
揚子江のハハハ漢土の故事
淮南子は七月
七日夜鳥鵲填河成橋以度織女
天の橋を渡りて

織女は天の橋を渡りて
の母の橋か
うも
し
の
夜は
う

中納言家持の話

天應元年十二月
の親王
元年
元

先は川継の僱人大和の士人よりもの兵器を推してひらき禁
中よりふ所司ふと捕ま推向す人より人川継隠謀と企
今月十日の夜後黨とあつめ北門より攻め朝廷と侵し人
とす故は下官を以て謀反の方人とす宇治の土を名將め彼日限
と定んてせしむる白状を及ひしれ帝より以てすんて身重
はし急な勅使を遣はさるる川継とあつめ川継勅使の例
とすひらき後つてあつて逐電せしと官使せしけりこれと
捕まて相武希詔しとてまり川継潜し乱謀とてくの色と
發見す其罪極刑と命せしむる志希崩御しとて縁衛のため
かゝる哀感の情やあつて川継の罪を免して伊
豆の國に流し母の不破内親王并に川継の姉妹を侍從に
命せしむるあつて時家持も川継を一味のすけえりこれハ

其実るはしれ向官に奪り外に都の外に由りし
ふれもはしれ其れをけりしれと宛の罪とめりしれはあつ
大夫は伊せりし時奥物の夷賊やとすれを乱を起す
とすれを家持と陸奥の按察使鎮守將軍は伊せしと延暦
二年三月に鎮東將軍とせしむる時家持上言せりしれは奥
の名取郡より南の十四郡山野の地と陣營とすしと遠き急
軍勢に徴すは機會とすしとすは權又多賀郡階上郡の二郡
を置百姓に募り集めて國府とめ至東西の夷賊を防ぐ
便しとすしとすは夷賊とのぼらきしとすは防備とす
訴へらきしとすは其の事とすしとすは防備とす
かゝるあつて家持の死に廿日とすしとすは葬式とす
さふ當帝の皇太子早良の親王とすしとすは帝の
大伴の継人大伴作良

西人は令して中納言藤原種継と殺害せしむるを都の内膳助
せり種継より人の位字合の孫として帝の寵を仰ぐ也
故天下の公卿も皆これに同意し任せて内外の事は皆種継に決
しと皇太子早良親王をこれと悪く憤りたすひて帝種継
中不和なりしを兼く種継とすかりんておけり
今年八月天白王奈良の美よ御事しすしと皇太子と種継
と小都の苗守と令せられしを山内と仰ぐ早良親王種継
竹良と種継と仰ひ相りあはせしりよ一々種継燭
のり種継してつらつらと見て種継人竹良ひらふさのい
種継胸板と只一突射徹しり種継其創を翌日
つら天皇奈良の美よ御事しすしと皇太子早良親王と廢して
幸ひ種継横死と傷せられたる位と賜ふてこれを

其れ種継人竹良并其徒數十人捕推問せりめたま
早良親王を斬られし種継と殺害せし白状を
やえ種継人竹良と斬罪を皇太子早良親王と廢して
流しなす初め種継人等究明しりし時大伴家持
謀りて種継を家持名籍を削ぎ其子永主
隠岐國に流罪せしむる也
其後桓武天皇崩御の時遺詔に種継を死せし家持
と中の位を復しり日本紀畧に種継を家持西
悪名として述べてありし事無実の事なりと家持詔に
せしめて万葉集二十巻を撰せしむる大日本史に
しりとの細いつり梅すし万葉集撰人の諸記に
今其集と考し且拾芥抄に載しし事の定まらぬ

家持の撰すゝとてしつゝ又安藤成章の撰り業平の
 容白しりしりしとせよ伊勢の撰りしりしり
 故に二一家持の撰り万葉集の撰りしりしり
 十万葉集十七卷平群氏の女即、歌十二首の撰りしりしり
 流の撰りしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
 三三女即の撰りしりしりしりしりしりしりしりしりしり
 あまの女の心けしりしりしりしりしりしりしりしりしり
 撰りしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
 三三女即の撰りしりしりしりしりしりしりしりしりしり

十傳は中務大輔
 船守の子
 日本紀は元
 仲磨の先祖
 氏は孝元天皇
 一の白子大彦の
 命の撰り

安倍仲磨

あまのふりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
 春日がらしりしりしりしりしりしりしりしりしり
 心月も

古今集撰旅部
 心月も
 心月も
 心月も

仲磨少令一々今友の遣唐使と接待せしめしとて清河
 日中一々時仲磨も海をせんく去宗もいふ所をいひて内史
 して平中交派むすひて詩人文人は書成ふは仲磨の時
 其時文苑英華唐詩品彙等もせしむるなり仲磨の
 友より王維包信趙驛等詩文孤絶する所別せしむ既舟
 出せして明洲より海をすて出せしりて唐人餉別の言ふに
 仲磨のいふ所を夜又の海を日限し其意を解す
 其れも國音通をすし唐人も其意を解す
 然るも漢語を譯しとて又せしむるも感嘆す
 其れも明州と出船しとてはしるはしる海を難し
 其れ既又奥腹は尋らんとせしむるの月日く南國漂
 其れは河を舟を再唐朝にせしむる其時仲磨は

其れ既又奥腹は尋らんとせしむるの月日く南國漂
 其れは河を舟を再唐朝にせしむる其時仲磨は

其れ既又奥腹は尋らんとせしむるの月日く南國漂
 其れは河を舟を再唐朝にせしむる其時仲磨は

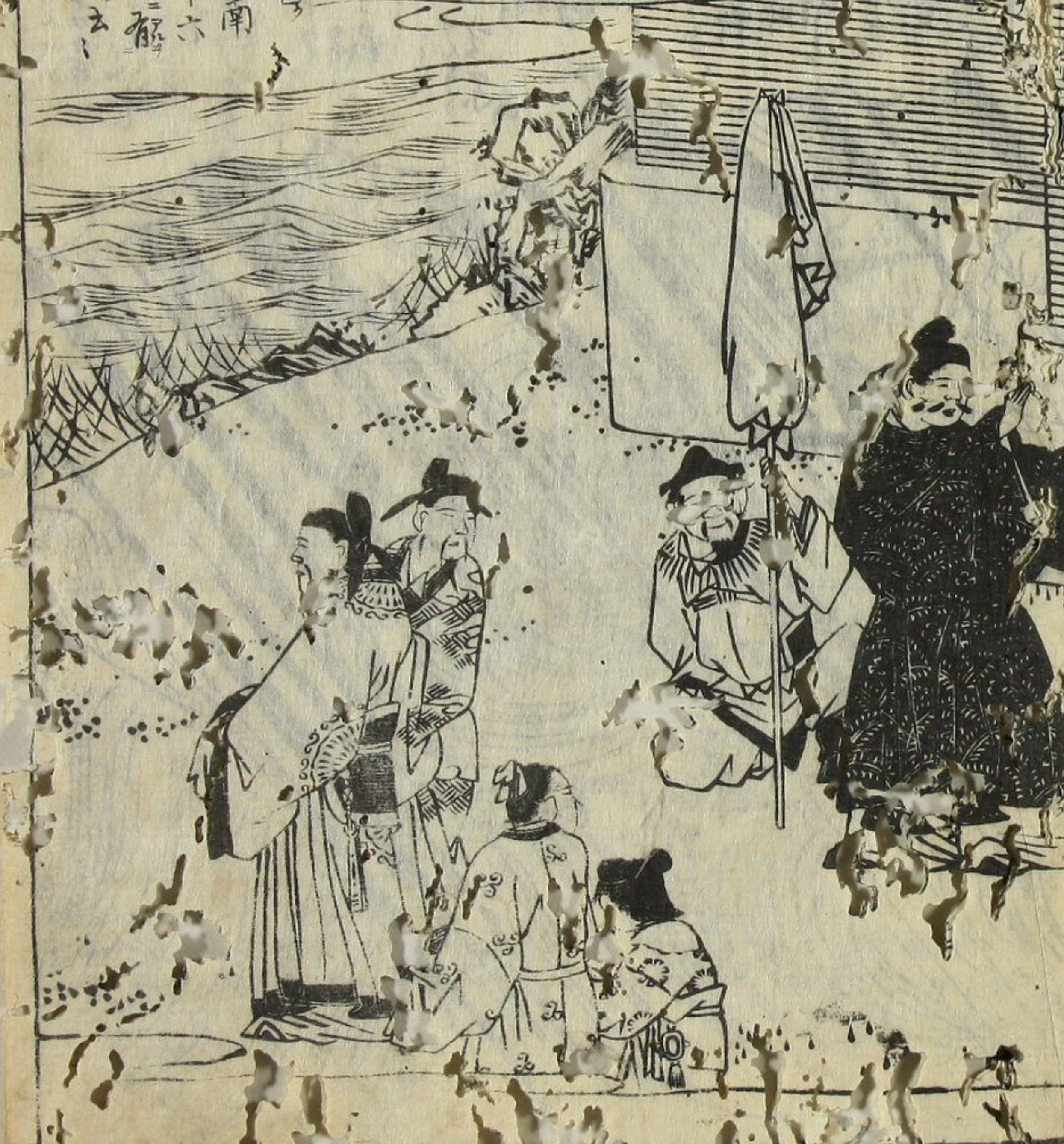
日本昆卿辞帝都
 明月不帰沈碧海
 片帆百里繞蓬壺
 白雪秋山滿蒼梧

大曆五年正月二十七日唐玄宗皇帝
 轉せし三十戸の食邑はしる南宗の所子代宗皇帝の

去年日記曰。九月廿日。おれ月
 のふたまた。ま。い。じ。り
 安倍れ仲磨といひ
 とふ。か。ん。こ。は。こ
 ま。て。か。ん。こ。ま。ま
 け。舟にの。を。き
 ち。を。て。か。ん。こ。ま
 こ。れ。あ。い。ま。！
 こ。れ。け。こ。
 か。ら。あ。い。ま。
 け。あ。い。ま。
 あ。い。ま。や。
 あ。い。ま。
 け。の。お。月
 あ。い。ま。ま。ま
 あ。い。ま。ま。ま
 あ。い。ま。ま。ま
 あ。い。ま。ま。ま



唐書地理志曰
 明州屬江南
 道開元二十六
 年置以攬都
 四年山及名云



遣使使非古帝十
五年付了て大徳
種我妹子を
使て信を
隨通せしむ

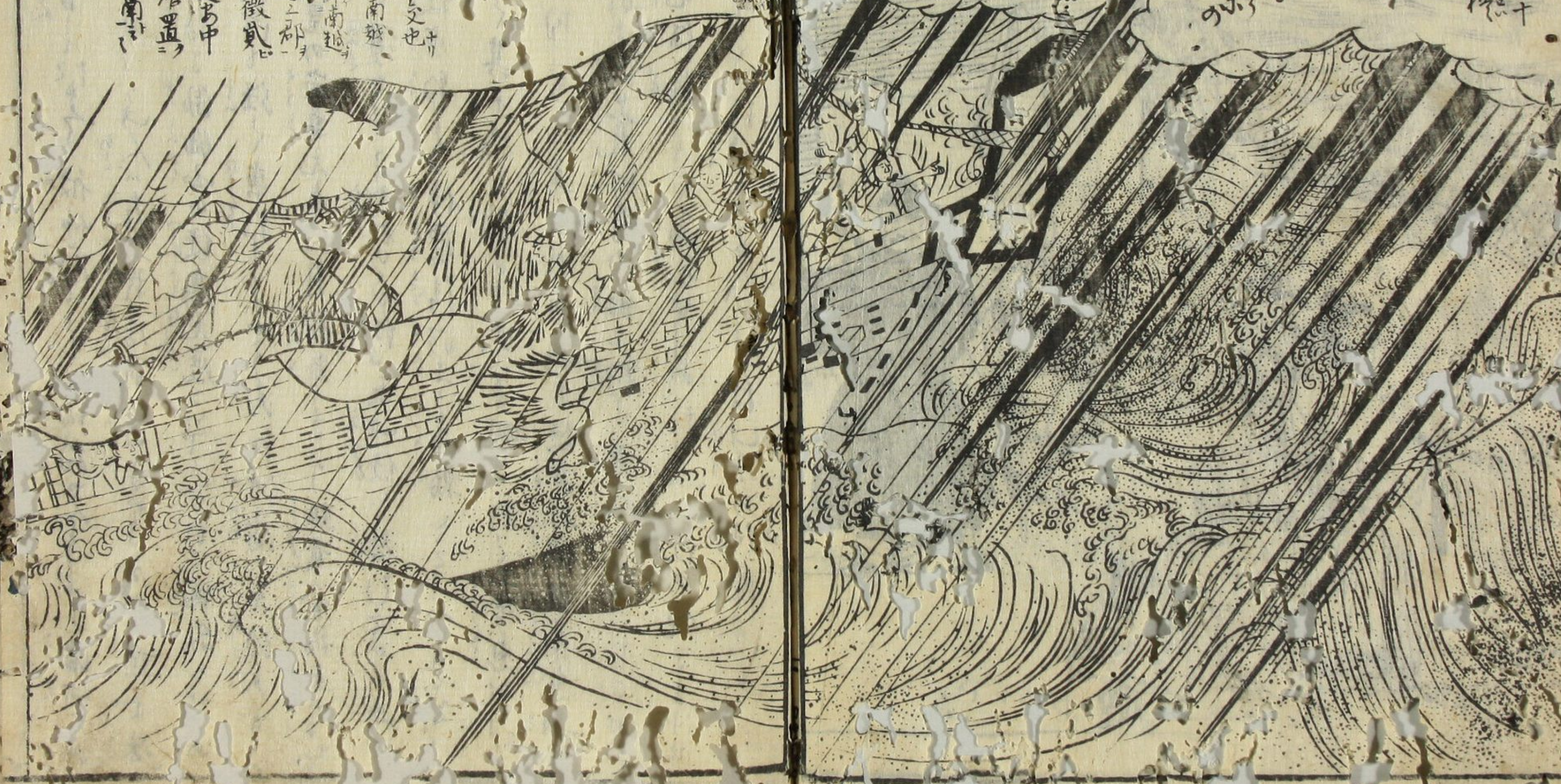
後唐國史に載
りて中
仲營ハ唐の玄宗
の時にて後朝
の事

此中より
右をゆつて
之望山に一軒
了地ハ唐の
事ハ四方に傳
る乃今と奪

海上觀
南國ノ原流
再ハ唐朝に實
るに付地
新

武備志曰

唐武備志曰
秦為象郡漢初南越
道陀據之武帝平南越
置交趾九真日南二郡
元封時女子徵側徵貳
反焉後討平之建武中
改交州置牧唐置
都護府改在安南



百人一首
卷之二

